育の形式が自由であつたから、子女の天分によつてはどんな早教育でも出來た。しかも、兒童心理への顧慮することなく、はじめから大人と同樣の教材を課したものである。かうした無理な教育形式は或る子弟にとつては教育の破壞であるが、或る優れた天才にとつては異常な發展となつた。從つて今日の教育が概して平才主義であり量的であるに對して、德川時代の教育は天才主義であり質的な大人物主義となつたのである。

當時の教育にとつては、學問で身を立てるといふことは、容易ならざる大望であり、「立志」といふことが教育の自發的出發として重大視された。今日の子弟に入學の當初にあたつてはたしてどれだけ眞劍な「立志」の實感があるであらうか。教育は選まれた者のみの特權ではなく、國民のすべての者に義務教育として普及したことはよろこぶべきであるが、その半面にはまた立志指導をおろそかにした點は、反省されねばならない。

山陽の教育は、すでに呱々の聲のあげた時からはじまる。祖父享翁が山陽のために贈つた「忠孝」の二文字は、山陽が、生涯肌身はなさぬ守護袋の中に入れられてゐたが、これこそ身についた忠孝教育の出發であらう。今日の學校に於ける忠孝の教育は、いたづらに形式化され美文化されて、子弟の日常生活と遊離した題目となつてゐる傾きがあり、今や幼稚園から大學教育まで、

「身についた教育」への再建が問題となつてゐる時であるが、それが爲には形式化されて魂のなくなつてしまつた入學式そのものを立志教育の出發點として、驚異的な行事とすることが必要である。山陽の少年時代の教育にとつて、何よりも重視されるのは、この周圍の立志的雰圍氣であつた。

母や叔父の教育の手を離れて、山陽がはじめて正式に入學したのは、九歲の年、卽ち天明八年正月十六日、藩學問所始の當日からであつた。それまでに八歲の暮から、學問所の教官、金子樂山、高橋公凞に學んだ。家庭教師の形で學問所からの歸途、經書の素讀から教へて貰ふことにしてゐたのであらう。しかし、山陽には當時の捧暗記の經書の素讀はつまらなかつたと見へて、遊びざかりで好きな晝間の合戰ごつこなどの爲に居眠りをしては叱られたらしい、後に山陽は當時のことを次のやうに述懷してゐる。

「予幼にして、府學生員高橋子に請ふて、句讀を受く。其の學を下るや、輙ち予が家を過ぐ。家爲に食を設け、食畢りて案に對し咿唔す。予或は睡る。輙ち喚んで之を勉む。此の如きもの數年、遂に盡く諸經子を誦す。概ね高橋子の力なり」

九歲の年は、山陽がはじめて就學した年であつたが、前節に記した通り、この年は殆ど疱瘡の

ために病氣に終始した年であつた。この年六月十日には、山陽の生涯にとつて最も重大な關係のある菅茶山が、弟子藤井慕庵を連れて訪ねて來た。菅茶山は父春水の親友であり、備後の神邊にある黄葉夕陽村舍の塾頭で、全國に名の知れてゐる詩人であつた。その時の茶山の詩に「喜んで見る符郎、紙筆に耽るを、童儀、倦まず、書檣に待つ」といふ句があるが、茶山が早くもこの少年詩人に着眼したことがわかる。

過度の勉强の結果、眼病となつたのもこの年であつたが、彼の向學心はますます旺盛に、單なる四書の棒讀みに滿足せずこの頃からすでに歴史物への興味が湧いた。

江木鰐水の山陽先生行狀記には「八九歳より、喜んで國字本、古今軍記を讀み、寢食を忘るるに至る、嬉戯又土を搏ち、城郭軍營の狀を作る」とあるやうに、早く史家山陽への立志の兆があつた。山陽も自ら當時を次のやうに語つてゐる。

「襄十歳の頃、先東邸に伴讀すること連歳、母子燈火鉞竇、余光に就て余に論孟の句讀を授く。溫習を懈り唯好んで所謂、繪本を觀るのみ。先君、之を都門に聞き、繡像保平物語及義貞記を買ひ、寄せ至る。襄、喜躍して覆觀す。前に觀る所に會ひ、ほぼ次第を成す。足らざる者は手づから圖を作り、糊接して卷を爲す。醜陋百出、然る後、史學、實に源を此に聞く、今、

物語を讀み、往事を追憶す。忽ち四十餘年、罔極の恩を念ふ。天覆地載、然して知らず報ぜず、老淚、卷に濺く、其の何によるを知らず。」

少年山陽は强ひられる通學的な學習よりも、史學に興味を持つてゐたのであつた。彼はいつも本の間に「汝、草木と同じく朽ちんと欲するか」と書いた小切を挾んで、勉强に倦くとその小切を叩いて自ら叱咤して朗讀したといふことである。

しかし、十歳の年（寛政元年）の三月には「論語」を終了、十一歳の正月には「元和訓令」十月には「易經」を學びはじめた。また十歳の十一月には外祖父飯岡義齋が歿したので、十一歳の五月には父も江戸から歸り一家は廣島の杉木小路の邸に移轉した。

十二歳（寛政三年）の四月には易經を卒業したが、有名は「立志論」はこの頃の創作である。

立志論

「男兒、學ばざれば則ち已む。學べば則ち當さに群を超ゆべし、今日の天下は、なほ古昔の天下のごときなり。今日の民はなほ古昔の民のごときなり。天下と民と、古、今に異ならず、而して之を治むる所以の、今、古に及ばざる者は何ぞや。國、勢を異にするか。人、情を異にするか。志有る人なきなり。庸俗の人は情勢に溺れて、而して自ら知らず、上下となく一なり。

此れ深く議するに足らず。獨り吾が黨、夫の古帝王の天下の民を治むるの術を傳ふる者にあらざるか。而して徒らに拘然として呫嗶是れ申ね、章を尋ね句を摘み以て一生の大業と爲す。亦己に陋なり。是れ其の業、貴しと雖も、庸俗となんぞ擇ばん。乃ち將に庸俗の侮る所とならんとす。噫男兒、學ばざれば則ち已む。學べばまさに群を超ゆべし。古の賢聖豪傑、伊傅の如き、周召の如き者も亦、一男兒たるのみ。吾れ東海千載の下に生るると雖も、生れて幸に男兒たり。又儒生たり、いづくんぞ奮發して志を立て、以て國恩に答へ、以て父母を顯はさざるべけんや。遇と不遇とは天なり。苟も古帝王の道を學んで而して得ることあらんか。神にして之を明かにすれば、我が爲す所にあり。我が爲す所、今日の情勢に合ひ、而して其の至るや、情勢、我に隨ふて而して回る。夫れ而して後、古の賢聖豪傑の成す所、吾れもまたちかかるべきのみ。たれか我が言の狂を云はん。吾れ生れて十有二年なり。父母の教を以て、古道を聞くを得ること六年なり。春秋、富めりと雖も、其の成るやすでに近し。苟も自ら奮はずして、因循、日を消す。則ちまさにかの章を尋ね句を摘むの徒に伍して止まん。耻ぢざるべけんや。是に於て書して以て自ら力む。又之を申べて曰く、噫なんぢ之を選び同じく天下に立ち、同じく此の民の爲にす。なんぢ庸俗に群せんか。抑も古の賢聖豪傑に群せんか。」

年僅か十二歳にして、すでに庸俗に群せずまた「尋章摘句の徒」とならず、賢聖の群に名を成した山陽の生涯を豫言してゐるやうである。人はみな「今日の情勢」に作られながら、自ら作る創作の人生を持つにすぎない。この「立志論」こそ、全山陽の簡潔なる自傳であり、自ら描いた素描である。

彼は少年時代にはやくも自己の基礎工作を作り、山陽建築の設計圖を作つたのである。

翌年、江戸の春水に送られた「十有三春秋、逝く者は水の如し、天地、始終なく、人生、生死有り、いづくんぞ古人に類して、千歳青史に列するを得ん」の詩もまた、「立志論」と姉妹篇ともいふべきものであり、これがために、栗山に識られて、「通鑑要目」の勉强となり、歴史家山陽への立志の端緒となつたことは、既に前章で述べた通りである。

また「旄を擎げて遠く出づ、白河の關」の詩を作つたのも十三歳の時である。

かくしてすでに歴史に開眼した山陽は、十四歳十五歳といよいよ自主的な學習態度となり、教師から與へられる他律的な學習には却つて反感を持ち、自ら家庭にある書籍を漁つて讀むやうになつた。そして今まで、「小學」とか「近思錄」のやうな道學風なものばかり讀まされてゐたのが、たまたま、蘇東坡の史論を讀んで、恰も光圀が伯夷傳を讀んだ時のやうに感歎した。

「吾れ宗學を受け、小學、近思錄に爛熟するのみ。十四五歳にして書を曝すに因り、蘇文史論を讀み詫して曰く、天地間に此の如く喜ぶべき者あるかと、乃ち窃に誦習し、手づから范增論及び倡勇敢策を鈔し、壁に貼して日々之を觀る。是より遂に論文を學ぶの志あり。」

「天地間に此の如く喜ぶべき者あるか」といふその喜悦の程が思ひやられる。後に「日本の蘇東坡」と呼ばれた彼は、はやくもその思想的根據を把握し、「通鑑要目」と東坡の論文や詩文への熱烈なる學修によつて、史家山陽の前途に限りなき領野を發見して會心の笑を洩らしたことであらう。

父春水は寛政五年(山陽十四歳)の十月からは歸藩してゐたので、寛政七年、十六歳の時には、地理學者、古川古松軒をはじめ、春水を訪ねて來る天下の名士や儒者について、各方面の見識を廣めることができた。

そして青年山陽の驚異的な史學的學習は、あまりにも早く結實して、十七歳の時には、既に「古今總議」といふ處女作の史論を作るに至つた。これは我が國の上古の制度から國勢變轉を論じ、當代制度を上古の制によつて建直すべしと結論したもので、後に、「日本外史」の序論の底稿となつたものと云はれてゐる。

「通鑑要目」の耽讀から蘇東坡に私淑し、ただちに「古今總議」に發現した彼の史學の躍進的な發展は、まさに超人的なものがある。

ただかうした超人的驀進のためには、彼の身體はあまりにも蒲柳の質であつた。

好事魔多し、病弱な彼は、間喝的にまた宿痾の頻發に惱まされねばならなかつた。

これよりさき、「十有三春秋」の詩を作り、「通鑑要目」を識つていよいよ史眼の開かれはじめた十四歳の年十月、春水歸藩の前後から、持病の癇癖がまたひどくなつた。特に「通鑑要目」の過度の勉强が原因であつたらしい。梅颸日記には、

九月廿三日　晴、夜、久太郎不快、山中に見てもらふ、肝けいの事のよし、

二十六日　陰、久太郎同事、狂氣のやうなる事、物事に疑深し、

十月二十六日　久太郎同事、今日あたりより、無言、氣重し、

二十九日　晴、久太郎同事、氣重し、牛尾玄珠へ療治たのむ、

十二月朔日　雨、夕晴、久太郎同事、物云はず、夜伊助（手嶋）と近思錄を讀む、

二　日　晴れ後陰、旦那、久太郎を伴ひ、學問所へ行く、

當時、世間では、山陽の病氣を、あれは「佯狂」だ「つくり阿呆」だとさへ言ひふらされるや

うになつた。その間にも春水は氣分を變へるために、學問所に連れて行つたりしたがかうした病氣が俄に快方に向ふ筈もなかつた。この年の十二月には袖留願が許されたので內視があり、いよいよ彼も少年期と訣別して一人前の青年となつた。

しかし、彼の病狀は依然思はしくなかつたものか、寬政六年（山陽十五歲）には、弟大二郎の生れた五月の末から五ヶ月程、叔父杏坪に伴はれて竹原に轉地した。この竹原轉地の半ヶ年は、病身保養のためでもあつたが、深く蘇東坡に私淑して史學評論に志を立てた彼には、得難い實地學習であり、長期の修學旅行となつた。すでに竹原には、山陽の教學の祖父享翁はゐなかつたけれどもかの「忠孝」の二字を千引岩に刻んだ唐崎赤齋は健在であつた。そこには賴家傳統の勤皇の精神を育くんだ竹原文學の遺跡があり、祖先の足跡があつた。かの千引岩の「忠孝」の二大字をはじめ闇齋派の垂加神道の來歷も、その地の名勝古跡によつて教へられたであらう。

なほ、かの「忠孝」の人、唐崎赤齋は同志高山彥九郎が、四年前久留米で自殺したことを聞き知り、山陽十七歲の時、祖先の墓前で屠腹した。山陽に「高山彥九郎傳」のあることは前に記したが、これ等の事實もまた多感な青年山陽の心に大きな衝擊を與へたであらう。

寬政八年、久太郎十七歲の正月八日には元服式があり、十五日には初めて參城したが、五月に

は弟大二郎が僅か三歲で夭折、六月には山陽がまた持病を再發、十月にはまた叔父杏坪とともに、石見有福の溫泉に二週間ほど轉地療養することとなつた。杏坪は山陽の病氣や煩悶に對する最もよき理解者であつたと見えて、溫泉でも「身は親の枝とし聞けばからさじと、かかる泉もかけもこそすれ」といふ暗示的な歌を山陽に示して慰めた。

この旅行中、紙の產地、津田附近で詠んだ繪のやうな詩がある。

行く〳〵覺ゆ、溪雲の脚下に生ずるを、
危巖、水を夾んで一橋橫はる、
登々たる峽路、天まさに黑からんとす、
間斷す、溪童の紙を搗く聲。

2、江戶遊學

寬永九年（山陽十八歲）三月、叔父杏坪は、藩主世子の侍讀として江戶に行くことになつたので、杏坪は春水夫婦に勸めて山陽を江戶に遊學させることとなつた。この遊學は山陽の意志といふよりは春水夫妻としては、當時の最高學府である昌平校に入學させて、あつぱれ儒官春水の後

纖たらしめようといふ考へからであつたであらう。

しかし、最愛の久太郎を遠く江戸に遊學させることは、子煩惱の春水夫妻にとつては、大英斷であつた。そのためにすでにその下準備として正月から三月まで、先づ藝藩學問所の寄宿所に入れて、父母の膝下を離れて共同生活の體驗をさせ、その間に藩に久太郎の江戸修業願を出して許可を得、母は衣服その他の遊學準備に忙殺された。

そしていよいよ三月十二日廣島を出發した。出發にあたり、父は家藏の方正學集と鎗一條を贈とし、母靜子は「不二のねも、あふみのうみも及びなき、きみとちちとの惠わするな」といふ「忠孝」の歌を送つて、前途を祝福した。眞に教育家の家庭らしい門出であつた。

かくて杏坪、山陽そして中島禎二を供につれた一行三人は、竹原に行つて墓參をし、神邊に寄つて菅茶山に逢ひ、岡山、兵庫、郡山、伏見、大津を經て東上、約一ヶ月の後、四月十一日、川崎から江戸に入つた。山陽は暫く霞ヶ關の藝州藩邸の杏坪の所にゐて市中見物をすませてから、昌平坂學問所の構内にある尾藤二洲の宅に厄介になることとなつた。

尾藤二洲は昌平坂學問所の教官で朱子學の大家であるが、足が惡いために構内に住んでゐた。この二洲と山陽の父春水とは共に大阪の片山北海の同門の士であるばかりでなく、二洲は五年前

に、春水の妻靜子の妹直子（梅月）を後妻としてゐるので、義兄弟の間であり、山陽には叔父に當る人である。春水夫妻が、病弱な山陽をここに頼んだのはそのためであつた。

山陽の江戸遊學は、寛政九年四月から翌年四月まで、僅か一ヶ年であつたが、向學心に燃ゆる山陽は、はじめて學問の檜舞臺たる江戸に出て得るところは少くはなかつた。

まづ第一の收穫は、廣島から江戸まで一ヶ月にわたる長途の旅行である。彼は旅行家であり叙景詩人であつたが、僅か十八歳の青年山陽が家鄕に送つた東遊日記一ヶ月の收穫は驚くべき修學日記であり創作旅行記である。三月十二日から四月十一日までの記錄をすべて漢文で書き、その間には、十數篇の漢詩があり、終りには母を喜ばせるために次の六つの寫生畫まで加へたまつたく獨創的な日記である。

一、近江國磨針嶺の景、二、岡崎城、矢矧橋の景、三、佐夜の山中より大井川を觀る景、四、薩陀嶺昇り口より三保松原を望む景、五、薩陀嶺登山の景、六、尾藤二洲邸内の圖面、

かつ、史家山陽の旅行は決して單なる物見遊山の遊覽旅行ではなくて、むしろ創作勉學の旅であり、勤皇の旅であつた。かの「嗚呼忠臣楠子之墓」の前に立つて得た感激を詠じた「七たび人間に生れて此の賊を滅さん」の詩や、一の谷を過ぎて源平の興亡を懐つて歌つた詩などの二長篇

のやうな、山陽の詩の中でも傑作と云はれるものも、この旅行中の産物であつた。彼の旅は「古意、蒼茫として行き且つ吟ず」の旅であり、「觀光、識るに足る帝王の尊きを、雲は餘す五色紫宸殿、日は上る三竿朱雀門」と詠じ「書劍、今來つて遊に倦まず、年少うして吾れまさに觀國を事とす。時平にしてまた封侯をもとめん」といふ大望の旅であつた。

「一の谷」の詩には、

九郎、眇軀、膽智は大なり、
懸崖絶壁、平地の如し、
胸中、蓄へ得たり、韜と略と、
旗を捲き、枚を啣んで、不意に出づ、
關東の驍虓、其の技を逞うす、
獲盡くす、平軍十萬騎、
勝敗、機あり、人の叙するを少く、
怪奇、溫に通ふ、兒童の語、
平家の闔族、絃歌を事とし、

驕逸、窮まる所、其の主を髦にす。

と歌つてゐる。幼少の頃から、武者繪で親しんだ英雄義經の智謀も、かく歌はれてこそ、まさに電擊作戰のヒツトラーと響いて來るのである。彼の旅はあくまで地歴一體の旅行であり、山野を觀ては民族の血液を想起する旅であつた。

江戸遊學一ヶ年の學問もやはり史學や詩文が中心であつた。

先づ叔父尾藤二洲に學んだのはいふまでもない。昌平校での規定の學課の外にも、毎夜のやうに叔父と史論を談じ時には曉まで論ずることがあつて叔母の梅月に「もういい加減にお休み」と注意される程であつた。かつて「通鑑要目」を教示してくれた柴野栗山の駿河臺の宅へも訪問して、要目の讀後感を聽かれいろいろ教訓を受けた。また古賀精里を訪ねたが、精里は山陽が上京の途中で作つた詩を見てその詞藻の優れてゐることに驚き、その後はその詩會にも時々列席した。この詩會では大學頭林述齋、大田南畝（蜀山人）などにも逢つた。

その他、叔父杏坪の指導を受けたのはもとより杏坪の師、服部栗藏をはじめその他の師友にも接してますます見聞を廣めた。また江戸遊學について、特筆すべきことは、山陽の海防思想を刺戟した人であり、春水や茶山とも親交のあつた大原呑響に逢つたことである。山陽入京の日、即

ち四月十一日、芝赤羽橋の茶店で呑響に逢ひ、その後も霞關邸内で逢つたのである。彼が、この年十二月十一日、父春水へ宛てた手紙にも「此間、大原左金吾（號は呑響）參り、松前蕃（露國）船抔の奇話、種々致し歸り申候」とあつて、青年山陽の海防への關心を示してゐる。彼が江戸に來た年に、イギリス船が蝦夷に現はれてゐた。當時の江戸には、すでに稻村三伯の、オランダ語の辭典「ハルマ解」も出版されて洋學も漸く盛んになり、蝦夷その他の海防問題が喧しくなつた頃であつたから、若き山陽が、道學者の講義にのみ熱中しなかつたのも無理ではなかつた。

事實、山陽はこの後に前にもただ一回の江戸遊學は、龍頭蛇尾といふやうな成績であり、昌平校の正課には必ずしも熱心ではなかつた。彼があれ程の大望を抱いて上京しながら、何故わづか一年で歸鄕したかといふ原因については、いろいろの憶說がある。

或る人は二洲の宅の女中に懸想して叔父に叱られた爲であるといひ、或るものは花柳の巷に遊び、酒色に耽つたため二洲に追はれたといひ、二洲の弟子の岡研水の書いたものには、「江戸を奔る途中、路銀給せず、途中六部に迫りてその衣服を丐ひ、又松脂に混ずるに何とかの香を交へて之を某の膏藥と稱し、行く行く之を賣りて以て京都に着せり」などとあり、また森鷗外博士は、山陽は江戸で伊澤蘭軒の家に居り、後に狩谷掖齋の家に轉じたといふ說を肯定してゐるといふ。また一說には「山陽の江戸にあるや、江戸城の廣大にして其の城門巍闕に過ぎ、上野芝の家廟に金碧を鐫めたるを見て、其の僭越を惡み、憤慨して曰く、江戸は穢土なり、江都に非らず、潔士の長く身を置く所にあらず、一日慨然として江戸を去るの志あり」とある、もとよりこれらは、一片の風說に止まつてゐるが、彼が昌平校で每日繰返される聖賢の講義に滿足せず、海防問題や現實の世相に刺戟されて、江戸を穢土と觀じ、むしろ勤皇の都、京都の方に憧れたことは事實であらう。若い山陽の腦裏には、學問とは大義名文を明かにすることの外にはなかつた。德川文化の爛熟し切つた江戸には彼を動かす何ものもなかつた。

彼が上京直後、母への手紙に、「見物仕り候處は、芝、愛宕、增上寺、神明前、お城、大下馬の諸大名登城、上野東叡山、不忍池、淺草、聖天、隅田川、梅若、日本橋見世物など、さきでは（後日）參らぬつもりにて、先日、一兩日に見てしまひ候」とあるが、江戸には、彼が詩情を湧かせる湊川もなければ兵庫もなかつた。「關西自から男子の在る有り、東向なんぞ降將軍とならんや」と楠公に讃歌をささげて東遊した彼であり、「時平らにして誰かまた封侯を索めんや」と歌つて來た山陽である。江戸遊學中、彼が殆ど見るべき詩作のないことは當然でもあらう。

かうした大望ある山陽が、ただ古臭い道學の學習に沒頭して、いはゆる天下樣あるを知つて天

子様あるを知らず、昌平校を出て官學者となり大名の御用學者となることを最高の目的としてゐるやうな書生達に伍して朗かである筈はなかつた。從つて書生達の方では生意氣な田舍青年として山陽を輕視したであらう。或る詩會の時、書生達は、一本の線香の燃えてゐる間に漢の武將三十人を題にした詩を作れるかと難題を出した。しかし、山陽が忽ち筆を取つて、大公、孫武、吳起、穰苴、白起、廉頗、李牧、孫臏、韓信、周亞夫、衞青、趙充、虞詡、馮異、吳漢、諸葛亮、周瑜、杜預、王猛、檀道濟、韓擒虎、李靖、郭子儀、李公弼、張巡、曹彬、苑仲淹、狄骨、兵飛、徐達の三十人を拉して一瀉千里に三十の詩を作つた時は、まだ一本の線香は一寸程も殘つてゐた。塾生達も啞然として山陽の詩囊の豐穰さに驚き、蘇東坡の再來と歎稱した。

しかしかかる小人の群に長く堪えられる山陽ではなかつた。彼が江戸遊學中、會心の力作は、かの勤王家平山平原を泣かせた名文、楠公論贊の一篇位なものであらう。「踵を重ね、息を屏け、敢て勤王の事を言ふものなし、而して楠公ひとり以て眇々の軀を以て義を其の間に唱へ其の衝路に當り、其の爪牙を挫き、以て四方の義士の氣を鼓舞し之をして一時に踵て起らしむ」といふ名文の中には、彼自身の江戸遊學の脾肉の歎もこめたのであらう。

しかし、孝心ふかい山陽は、自己のさうした遊學の苦衷は決して父母には知らせず、鄕里への

手紙には、「終日、御旗本入込、讀書仕候、あひには大名の子も參り申候、所謂、人中へ出て、襟懷を豁ふすると申は此事也。」とか「何分此度の勤番ニハ、マメナ人、マルナ人となり、かへり申度心積りに候」などと書き、又時にはいかにも江戸で面白おかしく暮してゐるもののやうに、「笑話有之候」などを母を慰めてゐる。

「貞平（供に連れて來た下僕）は、ニカイで、ワラヂヲツクリ、十二文宛に賣り申候、此男が山下御門へ、たび〳〵參り候て、よくおぼえ、ナンゾといへば山下御門と申候。此間もカフジ町へ、ツレ參り申候處、山下御門へ道をトツテ歸ラシヤレと申候、又上野邊へ參り候へば、山下が此邊ジヤガ抔と申候。故コイツが目（仇名）を、山下御門とつけ申候。山下御門とよび申候へば、答へて申候也、役に立たぬ事も御慰みに申候。」

山陽の孝心は以つて生れたものであり、後に、芳野や嵐山に母と遊んだ頃に俄かに出來たものではなかつた。

かくして山陽は十九歳の春、三月廿一日杏坪とともに木曾街道から歸鄕の事を父春水に知らせの手紙を出し、四月に入つて杏坪その他同藩の人々と共に江戸を出發、歸鄕の途についた。途中、神邊の茶山も訪ね五月十三日の夜、なつかしの廣島の我が家の人となつた。

山陽はかうしてこの一年の遊學以外には、遂に江戸に行く機會がなかつたが、しかし彼は江戸そのものを嫌つた譯ではなく、再び大いに學問の道に勵んだ後は、捲土重來、天下の學者の間に覇を爭ひたいといふ宿望を持つてゐた。この意味で、江戸遊學は必ずしも失敗ではなく、彼を更に大志へと鞭つ機會となつたことは事實であつた。

三、刻苦時代

1、煩悶

十九歳の春、父母の異常な歡びに迎へられて江戸遊學から歸鄉して後の山陽は、自分が立てた理想と家庭の現實との衝突のために、一大煩悶に追ひ込られた。これから凡そ十年は、彼が人生苦をつぶさに嘗めた刻苦時代であり、この煩悶の底に徹して、はじめて大山陽を錬成することの出來た雌伏期である。山陽が今少しく江戸遊學を續けて昌平校に學び、天下の大儒名士と交友して識見を廣くすることが出來れば、より以上の大人物となつたであらうと云ふものもあるけれど

も、官學ばかりが、この時代に必要な人物を錬成するものとは限らなかつた。

それこそ、筆紙に盡し難い人生苦に徹して、はじめて偉大な山陽を創作することが出來た。この黑幕をおろされたやうな十年の間こそ、人間山陽を創作し、また彼が最大の傑作、「日本外史」を生まんがための陣痛と煩悶の十年であつた。

歸鄉後山陽は、かかる煩悶の結果が、またも持病の再發に惱まされた。江戸でもすでに病狀があつたと見えて、四月廿五日付の二洲よりの手紙には、診察した醫師栗庵の注意や手當の事が認められてあつた。六月八日頃から例の通り無言で氣重くなり遂に床につくまでの容態となつた。春水夫妻は醫者よ灸治よ散歩よと療養に心を碎き、塾頭梶山與一に連れさせて夕凉をさせたり、宮島見物をさせたり、百方手を盡した結果か、七月下旬には快方に向つた。

その後、九月十一日の夜、親友大窪商山の別莊で友達と詩會か何かの會合に出席した時の文に、「煩悶について述べてゐる。友の樂たる大なるかな、古の英偉雋傑の士その常に壹鬱憤悶の想ある所の者は、則ちその才の用ゐられざればなり。その常に快豁爽邁の趣あるものは、則ちその志の合ふことあればなり。その才や、以て邦域を恢拓すべきなり。以て世代を匡濟すべきなり。而もその時と處と、その負へる所を展ぶべからざるものあり、是れその勢の爲すべからざる

なり。その志や禮俗これ拘らざるなり、譏笑これ顧みざるなり。而もその儔や、侶や、その抱く所のものを語るべきものなり。是れ興の已むべからざるなり。その已むべからざるの趣を以て、しばらくその爲すべからざるの想を忘れて、謂はゆる壹鬱憤悶なるもの、終に變じて、快豁爽邁とならん、是れ英偉雋傑の士が、友に重んずるゆゑんなり、蓋し千年の上に求むるもの、聚まつて一堂の下に在り、その樂たるそれ亦大ならずや。」

この一文にも見られる通り、彼は家庭の係累や俗人の中に煩悶し、友の間に快活な新天地を求めてゐたかが知られる。彼にとつては、吾を知るものは友あるのみであつた。山陽が江戸遊學から歸つた頃、備前の處士武元北林が宮嶋行の途中來訪して語つてから、二人の交情ますます深く、山陽も「忘年益友、足下に過ぐる者あるべからず」と云ふやうになつたが、今また大窪商山の別莊で、小谷、坂井、北川などの友と會飲して、壹鬱憤悶をわづかに散ずるところは、「友の樂」あるのみと觀じたのであらう。彼はこの儘でゐれば、廣島藩の儒官として一生羽翼をのばす機會のなくなるであらう將來を思ふと、ますます憂鬱であつた。二十歳の時の新年には、その心境をかう歌つてゐる。

一夢匆々たり、二十春。

春來、感慨、年とともに新なり。
世間萬事、紛として料り難く。
病裏、孤懷、鬱して伸びず。

かうした青年山陽の煩悶をよそに、春水夫妻は、山陽にはやく身を固めさせたいものと、昨年末、同藩の教官御園道英の女淳子を娶る事とし、年末緣談はまとまり、二月十五日結婚式をあげた。結婚は人生の一大事、山陽にとつては最も希望多かるべき二十歳の新年に、彼が「世間萬事、紛として料り難く、病裏、孤懷、鬱して伸びず」といふ心境にあつたといふ事實は、何よりも雄辯に山陽の苦悶を語るものであらう。

結婚と云つても新郎は二十歳、新婦は十五歳だつたと云はれてゐる。文字通りの早婚で、これは父春水が三十五歳の晩婚であつたから、山陽には却つて早婚を勸めたのであつた。父が結婚によつて山陽を家庭的に世間的に落付けさせ病氣が煩悶も癒るだらうと考へたのは、けだし眞に吾が兒を知るものではなかつた。かかる家庭的係累こそ煩悶の最大原因であつた。果然、結婚前後より山陽の放埒な生活が目立つて來た。結婚前、正月五日の夜更けに歸つたのを初めとし、十四日には左義長を見物するとて外出して歸りが遲く、華燭の典をあげて二週間もたたぬ三月十日も

夜遲く、二十九日には泥醉して歸るといふ有樣。その後、この遊蕩生活は年末まで止まず、父の訓戒も、春水塾の塾頭、梶山興一の忠告も、藩の御用人であり師でもある築山捧盈の說諭もすこしの反應もなかつた。十月六日には遂に新妻淳子は實家に歸つて泊るやうになつた。父春水も今はたまりかね、十二月七日遂に山陽に禁足を命じた。ただ、やはり兄春水にすすめられて僅か十四歲の少女を妻に持たされたことのある杏坪だけは、やはり青年山陽の理解者であつた。

この山陽放埒の原因については、當時、淳子以外に親には云はれぬ深い關係の女があり、しかも旣に姙娠して賴家の裏續きの岡田某にその私生兒を秘かに處分させたとか、山陽は盛んに宮嶋の遊里に通ひはじめ、宮嶋の花柳界では里鳥といふ變名で粹客の一人に數へられてゐたなどと云ふやうな說もある。當時の頽廢した世相の中に煩悶してゐる青年の周圍には、あり得べき說ではある。前者はとにかく、後者の宮嶋への脫線は單なる風說ではなかつた。

かくして「病裏、孤影、鬱して伸びず」と詠じて新年を迎へた山陽二十歲の年は、結婚の年であり脫線の年であり、遂に禁足といふ刑罰の中に暮れて行つたのである。

彼を知る者は友あるのみ。彼が「局蹐いづくんぞ離藩を守るを事とせんや」といふ詩を送つて、悶々の彼を勵ましてくれた忘年の益友、武元北林に、吾を知る者は君ひとりと感謝の手紙を

書いたのは、年の瀨せまる十二月十八日の事であつた。

2、脫藩

寬政十一年、廿一歲の新年を迎へると、山陽の心機一轉し賴家にも平和な春が訪れた。正月十五日梅颸日記には「晴、小雨、久太郎是迄の心得違ひを改め候事、與一共々申上る」とあり同日春水日記には「襄兒有改過陳說、君修（梶山與一のこと）侍坐」とある。

しかるに、折角、山陽の心境が平靜にかへると、今度は新婦淳子は、惡阻氣味で、正月廿七日から病床に橫はり、三月の雛節句には山陽の妹お十（十一歲）と一緖に他愛なく遊ぶやうなこともあつたが、その後はまた床についてヒステリーのやうに氣むづかしくなつた。五月五日の梅颸日記には「晴、淳、やはり平臥、御園禮に來り、藥與ふ、同人ねる時分は、小兒の如く口がましく、今日など別して、何やら氣に叶はぬらしく伊助ども呼寄せて泣く、久太郎が表へ、机、本など持行きて、わづらふものを捨置き、傍に居らぬといふ口舌なり」とある。

心機一轉した山陽は、決して家庭生活に落付いたが爲の變化ではなく、やはり淳子よりは「本、机など持行く」方が熱心であつた。淳子の姙娠を知つた山陽は、はやくも廿一歲で父とならねば

ならず、かくては家庭的係累も今はますます縛りつけられて身動きならぬ破目になるであらうことを考へると、大望への熱心はますます募るばかりである、かくしてまだ肩あげもとれぬ妻の惡阻の看病などは、到底この大志に燃ゆる山陽の堪へ得るところではなかつた。

彼は家にあつては、表座敷に机を運んで、專心學問に熱中し、一方築山捧盈の組織してゐる輔仁會といふ青年團體に入會し、「改亭」と號して文學に勵んだ。當時、輔仁會員の詩文集の跋で山陽は「心の死するは身の死するよりも哀し」といひ「今より以往、余は身の死せざるを保する能はざるも、心のごときに至つては、千萬載に亘つて、また死するあるなけん」と述べてゐるところを觀ると、彼が如何に內心の苦惱に生き、死ぬる思ひで現實と取組んでゐたかを察することができる。

當時、彼は廣島のあらゆる青年文人と交はり、廣島文壇の中堅となつた。廣島の山口鳴鶴、劉元高などと交つたが、また遠く、播磨、京都などからも彼の名聲を聞いて尋ねて來るやうになるとともに、彼はこの中國の小天地には到底、彼の活躍の餘地のないことを知つた。

かかる間に、彼の勤皇思想をいやが上にもかき立てたのは、伊勢の本居宣長の門人、橋本稻彥の歸省して、大いに日本神道を談じたことであつた。梅颸日記の、六月二十一日に「久太郎稻彥

とやらへ行く、稻彥、ゑびす町あたり町家の子、大阪遊學、又勢州本居春庵へ遊學、此せつ、歸省して居る者なり、和學するもの」とあり、更に七月十七日にも「久太郎、稻彥へより、夜九つ頃歸る」同二十一日「久太郎、稻彥、近日出船する由にて行く、九つ頃歸る」とあるから、橋本の在鄕は一ヶ月餘り、その間、始終往復して、この青年國學者と青年詩人とは大いに談じたものであらう。後に山陽は橋本の著書「紫文製錦」の序文を書いたが、その中でかう云つてゐる。

「吾が衣る所は和の衣なり。吾が食する所は和の食なり、衣食を和にして言語を漢にす。則ち曰く、知らず、本を知らざらんやと。若し人にして予が此の說を持する未だ合するあらず。今、橋本子に得る。蓋し子は伊勢の本居子に從ひ、而して和の言語を學ぶと云ふ。乃ち掌を振りて語る。相得て晩きを恨む。」

山陽の理想とするところは、支那文學者として終ることではなく、漢文を驅使して日本精神を表現することであつた。二人の青年がいかに和魂漢才、日本神道について談論に熱したことであらう。またこの一ヶ月の間には、山陽は自分の大志と煩悶とについても打あけたものであらう。

この知己の青年神道家は颯爽として東に向つて出船してしまつた。ひとり鄕里に殘つて病める新妻の傍にくすぶつてゐなければならぬ山陽の心境は云はずとも明かである。のみならず、この

年の春、春水の塾に入學してゐた書生福井新九郎とも別れねばならなかつた。三月廿五日に入塾してから二人の交情は日毎に深く、散歩にも宮島のお祭見物にも、まるで兄弟のやうに親しんだ新九郎は、七月六日、京都をさして歸つて行つた。

垂加流神道の流れを汲む竹原文學の中に、誓つて人となつた山陽にとつては、伊勢といひ京都といへば、名を聞くだに魂を打つ響きがある。勤皇詩人であり歴史詩人である山陽にとつては、近畿と九州の外には詩材はなかつた。廣島の小天地には、湊川もなく芳野山もなく、一の谷もなく、さりとて筑海の颶風も筑後川もなかつた。「吾が敵は正に本能寺に在り」で、若き山陽の心魂を誘惑するものは、ヒステリツクな若妻の姙娠姿でもなく、西の方宮島の遊里に群れる白狐の艶姿ではなく、東の方、伊勢へ京都へと、羽ばたきも勇ましく、つぎつぎに飛び去つた若い白鳥の群であつた。

遂に山陽にとつて、白鳥のあとを追ふ時が來た。九月三日、竹原から春水の叔父賴傳五郎の訃報があり、殊に、この春、三月からは父春水も江戸勤めで留守のため、母は山陽を會葬させることとなつた。山陽は五日の早朝、太助を共に連れて竹原へと出發した。途中、山陽は松子山で太助を刀を拔いて脅迫し、ひとり香奠料を旅費に東に向つて出奔した。太助の竹原への急報に驚い

た叔父春風は、直ちに石井豐洲等を走らせて後を追はせた。豐洲等は尾道、神邊から岡山、姫路と探し大阪までも行つて探したが遂に行衛がわからず空しく竹原に引返した。

八日になつてやつと久太郎出奔の報を受けた廣島の賴家の驚きは一通りではなかつた。恰も父春水の留守中の一大失策である。藝藩では惣領の出奔は重罪で、惡くすると息子は追打、父は知行百五十石の召上げ、輕くて閉門、謹愼は免れ得ないところである。母の靜子はその夜は一睡も出來ず、折柄、娘淳子の病氣見舞に來てゐた御園道英は娘の病氣よりも、母靜子の動氣抑への投藥に忙しく、十三日には晝夜二回も賴家を訪ねてゐる。病める新妻も小さい胸を痛めたであらう。九月末日には淳子も御園家に里歸り、賴家は火の消えたやうにさびしくなつた。

その後も、追手は八方に飛んだが、しかし山陽の消息はわからなかつた。賴家の定紋を附けた着物を着た乞食が西條驛近くにゐたとか、山陽とおぼしい乞食姿の青年が姫路あたりで軍談講釋をして一錢二錢の路銀を集めてゐたとかいふやうな風の便りがあるばかりである。

この間にあつて、かねて山陽の心底を見拔いてゐた叔父杏坪は、この青春期の危機を遂に脫藩によつて切拔けた山陽の苦衷を知り「宿志」と視た。杏坪が大阪の飯岡存齋に送つた手紙には、

「本人の儀、素より刑害を犯し遁げ去り候樣の儀に毛頭之れなく、但、豪俠狂妄の所爲にて御

座候、然し、狂妄なりに宿志も之れある事と相見え候へば當分は必ず潜み居り候て、追手も忍び申すべし、若し御見當り、卒爾に御留置なされ候はば必ず逸去仕るべく候間、御見當の事も御座候はば、隨分御談合にて御周旋御取計らひ囑したてまつり候、誠に弊家存亡の係る所に御座候へば、費用は何程入り候ても苦しからず候間、御手厚き御取計らひ下さるべく候」

といふ山陽の精神になり代つて書いたやうな文面がある。この「三角」の叔父はいかなる場合にも山陽の理解者である教育的父兄であつた。そして、杏坪は山陽の出奔先もすでに見拔いてゐたものか、十月十三日、高砂の菅野眞齋へ送つた手紙に、「多分は京都の福井新九郎方へむけ、上り申すべくと察し候、新九郎は、去年、遠遊約束仕り候樣に相聞え申候、新九郎同類にて御座候へば、隱し置き候事も計り難く……何卒御方略を以て御探し出し下されたく願ひたてまつり候」

とあつたが、果して山陽は廿九日に至つて新九郎方に潜んでゐることが、京都、金山重左衞門の手紙により發見され、ただちに飛脚は大阪から廣島へ飛んだ。かくて十月十日叔父春風は廣島を出發して京都に向つた。

賴家は悲喜劇の二重奏で、山陽の脫藩騷ぎの中に、若き姙婦靜はもはや十月となつて賴家に歸り、十五日は着帶式があり、內祝ひが行はれた。

江戸で父春水が異變を知つたのは、春風が山陽を迎へに廣島を出發した十日の後であつた。幸に藩主淺野侯からは別段の御咎めもなく、春水の功によつてか有難き恩命の沙汰があつた。

春水は家督相續者として別に養子聽許の內談を藩に持ち出したので、子の不行跡に關らず春水は儒官としてますます重用された。

一方、廣島では十五日はじめて春水からの手紙によつて、その指示によりお上を憚つて謹愼させるため、山陽拘禁の座敷牢を作ることとなり、二十三日からは大工が入り込んで工作にかかつた。

二十三日の梅颸日記に「晴、陰雪ふる寒、大工大勢來り仕構へする。今夜大方歸らんとの事にて夜へかけ騷動いふ許りなし」とある。かくして、山陽が「宿志」の脫藩も、最小限度の犧牲に於て遂行された。今は天下晴れての浪人となつた。浪人、それは山陽があらゆる封建的束縛から解放されて、本然の自己に還つた姿であつた。

十一月三日、山陽は叔父春風と伊助に連れられて一ケ月目に廣島袋町の我が家に歸り、かねて準備の幽室にはいつた。母の梅颸夫人は、その姿を視るにしのびなかつたものか、前もつて杏坪の家に移つてゐた。

3、幽　居

幽居後の久太郎は、父春水の指示により「憐二」といふ改名のもとに、文字通り俗世間の雜音を絶ち、家學に訣別した別天地に生活することとなつた。眞の山陽の生活はその日から始まると云へるかも知れない。幽室こそ山陽が念願の思索の室であり、學問の部屋であり、自己教育の書齋である。彼の幽居生活は、廿一歳の十一月三日から、廿六歳、文化二年の五月九日まで、約五年間である。その間、始めの一ケ年は園時代で、次の二年間は仁室時代となり、後の約二年間は謹慎時代である。園時代こそ牢居生活であつたが、仁室となつてからは、悠々物を書くことを許され、更に仁室を解かれてからは、外出を禁じられてゐるだけで、家族とも友人とも自由に語ることが出來た。そして五年目に「尤も謹慎筋之儀は勿論、外向參會之儀も萬端謙遜第一の心得肝要之事」といふ但し書はあつたが、しかし、殆ど自由な青天白日の身となつたのである。

これは幽居學校五ケ年の山陽の自己教育の課程から見れば、むしろ誂へ向きのものであつた。この間に彼の身の上には、一大變化があつた。即ち、山陽の幽居とともに春風の長男熊吉（諱は元鼎、字は景讓）が春風の假養子となり、山陽は廢嫡されて、いよいよ惣領といふ束縛を脱し

た。更に淳子は御園家と相談の上離緣となつたが、享和元年二月廿日、里方で男子を安產、都具雄と命名された。これが山陽の長男、余一（號は聿庵）で、生れ落ちると共に賴家に引取られ祖母梅颸の手で育てられることとなつた。彼は妻子の係累からも解放され、いよいよ天涯に自由の身となり、ひたすら自己の中心目標にむかつて精進することの出來る境地に達したのである。

もとより、長男の廢嫡や幽居謹慎などといふことは、儒官たる春水一家にとつては、世間態のよい事ではなかつた。春水は幽居の初め江戸から菅野眞齋への手紙で「不埒者の樣は、當月三日に召捕り歸宅いたし、御存じの座敷の上の間へ、板にて牢を構置き、それへ打込之れあり、錠前つけ申候て、番人などつけ候と申し來り候」と述べて居る。世間態を憚る父の苦衷が言外にあふれてゐる。

しかし青年山陽にとつては、外面的な俗世間への面目などは問題ではなかつた。すべては山陽自身を大成することによつて償ひ得るものと信じてゐたであらう。あらゆる孝行の中で、祖父の遺志、そして父春水が修史の志を大成すること、これほどの大孝はあるまいと考へたであらう。生れて以來、肌身はなさぬ「忠孝」の二字をあらはすこと、それは千百の刻苦を要する仕事であり、そのためには俗世の形式的な些事の犧牲は止むを得ないことであつた。

そして彼が幽室學校での第一のそして唯一の仕事は、年來の宿望たる修史のほかにはなかつた。この大事業を遂行するは五年十年の隔離生活なくしては到底不可能であつた。

山陽は、入牢後、兩親の書いたものを藏きたいと云つて、母から春水の書いた「藝傳孝子傳序」と梅颸が山陽江戸行の時與へた和歌とを幽室に入れてやつた。山陽の幽室學校はかうして、父母の心を讀むことから出發した。そして春水留守中の塾長、梶山立齋に讀みたい書物を書いて差し出した。それには

論語、孟子、禮記、詩經、書經、春秋、左傳、中庸、近思錄、易經、史記、戰國策

などがあり、これは修史の準備學修として讀んだもので、この外に修史のために文章練習の必要があり、そのほか、史記、莊子、國策、漢書、管子、韓非子などを讀んだ。

かうして幽居の間に「山陽文稿」なども書きはじめ、最大傑作たる「日本外史」の構想を幾回も練り直した。文化二年頃には、「日本外史」の設計書を大體次のやうにまとめてゐた。

三紀　提記神武至後陽成大事爲三卷。便童蒙也。凡以下諸書。皆爲便蒙而作。非所以示大方也。

五書　輿地書。封建書。官制書。財用書。法律書。

九議　大勢議。平安議。前鎌倉氏議。後鎌倉氏議。中興議。室町氏議。安土氏議。浪速氏議。總議。

十三世家　藤原氏世家。平氏世家。源氏世家。北條氏世家。楠氏世家。新田足利氏世家。足利氏世家。伊勢氏世家。毛利氏世家。武田氏長尾氏世家。織田氏世家。豐臣氏世家。

二十三策　君權內治。大臣監察。詮吏革弊。分祿選擧。用材得失。均田釐籍。財利之計。財利之計。財利之計。財利之計。財利之計。財利之計。務農富國。裁制商賈。平均米價。開墾新畚。水利河漕。金錢楮鈔。銅鐵之制。市肆征課。貨權輕重。法律刑名。訟獄保甲。

右皆猥陋不足見者。獨僕性喜讀國志。卒得此數種。若其擬策。徒摸其文焉耳。非叨談經濟。爲出位之言也。千萬垂炤。

これは文化二年三月、長崎からの歸途に立寄つた仙臺の大槻平泉に、序文を求めた時に示した「隱史」の腹案書であつて、史記の體にならつた尨大な設計である。この中の「三紀」が後に變じて「日本政記」となり、「十三世家」が「日本外史」の原案となり、「廿三策」が「新策」や「通議」となつた。

この「日本外史」のために精讀した書籍は、次のやうなもので、これらは賴家の藏書や藩主淺

野家の別邸天青閣の書庫などから借出したものである。

本朝通鑑、大日本史、通語、逸史、列祖成績。（以上、基本書）

陸奥話記。保元物語。平治物語。保暦間記。源平盛衰記。平家物語。神皇正統記。太平記。明德記。應永記。應仁記。信長記。太閤記。藩翰譜。武德編年集成等（以上参酌書）

これ等の書物を晝夜の別なく繰返し精讀、熱讀し、想を練つては原稿を推移補正した結果、文化元年、「山陽文稿」上卷を執筆後、眼病となつて右眼腫れふさがり遂に讀書を禁ぜられたこともあつた。眼病が癒ると今度は咽喉を痛めた。しかし大望の前の彼には、ひたすら刻苦あるばかりであつた。

幽居時代に、得た親友に江戸の市河米庵があつた。山陽二十五歳の時、長崎旅行の歸りに賴家に滯在中、ふたりは胸襟を開いて大いに語り、その後も長く文通を續けた。翌年は仙臺の大槻磐里、米澤の大貫退藏が、共に長崎からの歸途、親交を結んだ。

しかしながら幽居以後三十歳までの十年間は、要するに大山陽への飛躍の前の雌伏期であり、青年山陽の練成期にすぎなかつた。

彼の歴史には、いかなる頁にも空白はなく、どの頁にも眞の休日はなかつた。淵と沈み瀨と流

れる底には、いつも千人力の刻苦があつた。

山陽は單なる歴史の研究家ではなくて、自らの歴史の天才的な創作家であり、また單なる政治の評論家ではなく、自らの生活の政治家である。なんと山陽の歴史や生活が、彼の筋書通りに運んでゆくことであらうか。昌平坂學問所のかはりに幽室學校へ入學し、藩儒のかはりに自由な民儒の地位へと「手足と眼耳とまさに己の心に由つて用ふべし」と歌つたが、ひとり足と眼耳とのみではなかつた、彼は與へられた歴史と運命とを、己の心に由つて用ふるに妙を得てゐた。衣も食も酒も、色も、彼は己の心に由つて用ひた幸運兒である。

また彼は「文をやるは猶兵を用ゐるが如し」といひ文章法は章句の兵を用ふる戰法であるとしてゐたが、生活の歴史の闘所々々を突破しては進む彼の電擊作戰は悉く成功した。しかしながら、人は彼の幸運な彼の一生を、單に運命の僥倖と觀てはならない。それがためには、あたかも湊川における楠公の奮戰にも似た七生の奮闘生活があり、遂に彼もまたそのために弓は折れて倒れねばならなかつた。彼が運命を驅使し、歴史を作り直し得たのは、ただ異常な刻苦の力であつたことを知らなければならない。

四、獨立時代

1、雌伏

文化二年、山陽廿六歳の五月、いよいよ幽居謹慎から解放され、外出も許され此の頃とかく病氣勝の父春水の代講を努めることとなつた。これには築山棒盈の盡力によるところが多く山陽は「築山君は我に再生の恩ある者」と云つて感謝してゐる。これから三十歳頃までの五年の間は、長い幽居生活の後の休養期でもあり、更に大山陽への跳躍を前にしての雌伏期でもあつた。

この年の秋には竹原に遊んだ。これは約一ケ月がかりの壯遊で、一行は父春水、義弟景讓、妹お十の外、德島から來てゐた赤松鳩峰や從僕など合せて十四人であつた。山陽は、十餘年目に享翁の墓前に參り、忠孝石をはじめ竹原の名所に足を運んだ。後には菅茶山や西山復軒なども來遊したので、照蓮寺で詩會なども開かれた。その時作つた山陽の文に「菅、賴二家の聚まる處ること、未だ今日の會のごときはあらざらん、……人の聚散死生は、蓋し草木の蕃るに若かざるか。

則ち今日の會、宜しく觀を罄し娛を極むべく、未だ十餘年の後を期すべからざるなり」とある。

竹原へはその後、文化四年（山陽二十八歳）の秋、春水、杏坪、景讓、杏坪の子などと共に遊んだ。竹原の春風の家に一家三族が集つたのは三十年目のことであつた。今度も詩會や舟遊など文學者一族らしく遊んだが、就中石井豐州の催しで床の浦の舟遊びの日、山陽が尾の道の女畫家、平田玉蘊、玉葆の姉妹と同船したことがあつた。姉の玉蘊は山陽を繞る女性群像のなかに忘られぬ人であつた。

山陽は父の代講や代作のかたはら、依然として修史の仕事に精進をつづけた。この間に、「小文規則」「古文典刑」などといふ、文章讀本のやうなものも片手間に書き、二十歳の時にはすでに、出世作「日本外史」も「新策」も初稿を書きあげてゐた。即ちこれで彼の自ら作つた幽居學校の中心課程は卒業した譯である。これを提げて天下に問ひ、更に千歳に問ふべき作品の原型は作られた。これを作り上げるまでは、別に他人から牢の中に入れられる迄もなく、面會謝絶、門外不出の書齋が必要であつた。かくして、幽居を解かれ、外出をゆるされるやうになつた山陽は、自分や父の身體の保養のために竹原などに遊んでゐるけれども、やがては廣島の小天地を脱して、江戸か京大阪に乘出し、中央文壇に新しい國民文學運動の覇を唱へようとする大望は抑へること

はできなかつた。今は、せめてその飛躍の前の雌伏期であり、慰勞休養の時期であつた。

休養期と云つても、山陽には一日も眞の停滯期はなかつた。今日の休養は明日の飛躍であり、明日の飛躍は今日の設計に基く、彼が暫く遊志を抑へて家族とともに休養してゐるのは、せめての長い間の不孝に對する氣休めにすぎなかつた。

すでに彼の一大修史事業は成つた。天下に雄飛する自信はもや出來てゐた。五年餘の禁足生活は山陽にとつても一つの鎖國生活であつたが、その後、幽居解禁とともに、諸名士の來訪を受けて再び天下の形勢を知ることが出來た。山陽を誘惑する白鳥の去來は頻繁となつた。かつて長崎からの歸途、立寄つた江戸の市河米庵との親交はますます深くなつたが、米庵は江戸に歸るとロを極めて山陽を推稱宣傳した。栗山、二洲をはじめ江戸の文壇でも、暫らく忘れてゐた山陽の文名が再び話題にのぼりはじめた。江戸の詩人菊池五山は、米庵から山陽の文を見せられて「諧謔愛すべし。かくの如き才人、われまさに黃金に鑄て之に事へん」と「五山堂詩話」の中で宣傳してゐる。五山の心の庭には、銅像ではなくて山陽の金像が建てられてゐたのである。

かつ、當時はまた警報頻々として、蝦夷や長崎の噂が大きくなつた時である。即ち文化三年（山陽二十七歳）の九月には、ロシヤの軍艦が樺太に入冠し、翌年四月にはエトロフ島に來航、

奥州各藩は出兵して防禦したのである。山陽がこれを聞いて「幾家の閨婦、邊報を遲しとす」と歌つたのはこの頃であつた。また、蝦夷まで行つた船頭新太郎やアメリカまで漂流してゐてオランダ船で送り屆けられた船頭善吉の實驗談を聞いたのも、また海防の意見書を作つたのもこの頃である。當時、彼を訪ねた文人墨客は、殆ど皆、長崎への往復途上の人であつた。市河米庵、櫻井圭齋、大槻磐黑、大貫退藏、浦山玉堂、伊藤蘭軒など、みな長崎への往復の人ばかりである。殊に市河米庵から聞いたオランダ船の話は珍らしかつた。これらの來訪者を送迎する間に、いかに山陽の遊志ははづんだことであらう。文化六年、長府藩儒臼杵鹿垣が銅印を贈つて來た時の詩には、

西關の折戟、海沙の間、
化して篆刀となり、刀色寒し、
多謝す、一揮、我が軍を授け、
能く赤幟をして、文壇を照さしめん、

とあるが、この古色を帶びた銅印を、壇の浦の戰に折れた戟の變じたものではないかと感謝し、この歷史的な援軍を得た上は、いよいよ文壇に雄飛することが出來るといふ意を歌つたのである。

しかし、雄飛のためには、なほ幾つかの難關を突破しなければならなかつた。

2、飛躍

大望のある者にとつて警戒すべきことは、環境との情實的癒著である。山陽も幽居解禁後五年幽居後、十年の自邸の生活にずるずると引込まれては、折角の飛躍の機會を失ふ危險があつた。しかも廢嫡となつた身分ではありながら長男であり實子である山陽と、養子の景讓とが同居してゐる間には、山陽の方は「宿志」があるとしても、景讓にとつては長い間には人の知らない煩悶もあるであらう。また當時九歳の聿庵は、山陽の子ではあるが、兄と呼び、表面上では祖父春水を父として居り、景讓は要するに春水から聿庵に、家督を相續するまでの便宜上の養子とも思はれぬこともなかつた。この點では、山陽と景讓とは、共通の物足らなさもあつたであらう。

また廢嫡にしたとは云へ山陽の父にしても自分が病氣勝となり次第に老の迫るにつれて、昔日の世間の手前、斷乎、他所に養子にでもやらうといふやうな意志にもなつて來るであらう。「能く赤幟をして文壇に照らさしめん」ためには、山陽もいよいよこの家を出ることが必要である。それには、何よりも父をして一日も早く山陽を他家にやるやうに思はせるとともに、景讓をしてこ

の家に安住させるやうに仕向けねばならない。それかあらぬか、この頃、養子景讓に自棄的態度が見え時々、實家の竹原にも歸るやうになつた。

この現狀を打破する手段としたものであらうか、三十歳の山陽は、文化四年正月から、傳家の寶刀ならぬ遊蕩病を再發して、また「外出夜歸」が續くやうになつた。

しかも、今度は、景讓とともに宮島の妓樓で低唱淺酌の快にふけるやうになつた。山陽が景讓を誘惑したとも云はれ、景讓が山陽に同情したとも云はれ、又山陽は景讓を諫止しようとして、遂にミイラ捕りかミイラになつたとも云はれる。

しかし當時山陽が、親友豐洲に與へた次の手紙には、山陽が景讓（權二郎）に同情したもののやうである。

「申さればならぬは權二郎（景讓）が事なり。是は誠に大困りの事なり。當正月の僕のみそは唯權より御聞下さるべく候。又しても〳〵みそを付け申し候。夫ゆゑ家庭の首尾大いに惡く候。今度は權のみ、その始めにて、僕の薫陶然らしむる所と申す樣に、諸老思はれ候樣に考へられ、扨々迷惑至極、……僕は權と親密の事ゆゑ、何事も承知、二傑（春水、春風）などゝ知れぬ内に、何卒やめ候樣にかげになり、ひなたになり、異見仕候へども……權隱志勃々……隱

志は五六年前より作輟しあれども、とかく竹原あれば、其の志が發るなり」

これが恐らく眞相であらう、「權隱志勃々」とあるのは景讓が聿庵に早く讓つて隱居するといふ希望で、實家竹原に歸るとそれがまたおこるといふのである。

また當時の山陽の心境は、嚴島祠の祠職、野坂元貞への手紙にも知られる。

「小子事、御承知の通の自分にて、海の物とも河の物とも附き申さず候。奉公筋、相勸め候ものもこれあり、上にも段々ひいき致くれ候人も御座候へども仕官は一切好み申さず候にて、欝欝、此の身を終り申すべき候體ゆゑ、小子も欝陶無聊、前途に望もこれなき故、御承知の放蕩に及び申候事に御座候。是も權次郎、此の地にて茶屋はいりなど繁く御座候故、夫を療治仕る可と□□をはじめ、小子もおもしろくなり候て、右の通りに及び候、其の内に小子心底、權次郎を惡人に致し、自身ひとりよき顏をして、再び家督をと心懸候などとの評を受け、夫れが口惜しくて、一倍知れても構はぬ氣になり、蕩遊候事に御座候」

もとより、山陽が遊蕩はただ飛躍の手段として用ひたもので、何等非難すべからざるものといふことは出來ない、いかに當時の世相が頽廢的であり、各地の花柳界の誘惑が烈しかつたものとしても、目的は手段を選ばずとして不問に附することはできないであらう。彼が自らいふごとく

「みそ」はどこまでも「みそ」であり、性來の弱點がそこにあつた。

ここに於て父春水はもはや一刻も猶豫はならず、山陽の處置を講じなければならないこととなつた。恰もこの時、文化六年九月十六日神邊の菅茶山から春水に次のやうな手紙が來た。

「然ば久太郎殿、部屋住と申體にて御座候、苦しからず候はば私方へ申し請け申したく、存じ候。私も御案内の老境、閤塾附屬いたしてこれなくこまり申し候に付、存じ寄候事に御座候、相成るべき事に御座候はば御相談成し下されたく御返答次第にて然るべき人にてもさしあげ申すべく候」

春水はただちにお上の許しを得て、山陽を茶山の塾に遣ることにしたのは勿論である。かくして茶山からお迎への使者も到着し、十二月二十七日、山陽三十回の誕生日にあつていよいよ廣島を出發して神邊の茶山の塾へと向つた。ここに於て、山陽の筋書通り二十臺の青年山陽から、三十臺の大山陽へと再出發したのである。

出發にあたり春水は、山陽に次のやうな訓戒を與へた。

菅塾へ罷越候ては

一、先生家法、大切に相守り、先生存意、毛頭背き申すまじく候儀は勿論、諸事瑣細の事たり

とも相伺ひ取はからひ候事

一、先生家學に精勵いたし、諸學徒と熟和、厚く一同に課業、怠りなく候事

人材をそこなひ申さざるやうにと、常に心置き然るべく候。

一、近邊其の外附き合ひ、謙遜を主とし、別けて福山御家中、失禮これなきやう致すべく候事。出入の男女ども率雨の事これなきやう致すべく候事。

一、飲食衣服、自己内分の取はからひこれあるまじく、たとひ藥餌たりとも同樣の事、錢穀の出入、自分雜費とも、皆々差圖を受取はからひ候事。

一、朝暮れ行事起臥の時刻等、自己の便利にて自由がましき義、あるべからざる事。

一、近所の出婦ともたび〳〵相伺候事、此地はもちろん諸方ともたびたびこれあり又相伺候事

そして、更に山陽出發後は、人に託して、祖先傳來の鎗一筋を山陽の物として、茶山の塾へ送つた。多感な山陽ももとより父母の愛情を知らないものではなかつた。

備後に赴く途上の詩がある。

「師に縱ひ志にかなふと雖も、主を戀ふ豈に情を忘れん。遲々として行き且つ止まる。回顧するは廣州の城、阿爺は我が訓を申し、阿孃は我が衣を裁つ。何を以て斯の德に酬ひん。寸心、

「至する所あり」

3、山茶塾

備後、神邊にある黄葉夕陽村舍の主、菅茶山は、關西文界の重鎭であり、當時詩壇の第一人者であつた。その經營する黄葉夕陽村舍は幾棟もの塾舍、二個の書庫、幾段の塾田を持ち、一時は生徒も數百人といふ堂々たるものであつた。從つて、この茶山塾頭の後繼者となるといふことは、羨望すべき立身の道であつた。茶山はもとより山陽も歡んで來たものと信じてゐた。

しかし、山陽が大望の前には、いかに第一流の儒者の家であつても、春水塾と五十歩百歩、神邊のやうな一寒村に埋れてゐるものではなかつた。云はば三都へ飛躍の第一歩として、周圍の情勢から彼は神邊行きを決心したのである。前記の棚守元貞への手紙にあつたやうに「尤も養子と申すにてはこれなく、家名等改め候に及ばず、學統相繼候までの事に御座候、小子も心に滿ち申さず候へども、爰元に鬱々と致し居り候より、先は身分片づき候方に候故、此上游寓の事も、追追成就仕るべくと存じ樂しみ居り候」といふのが、山陽の心構であつた。

迎へる者と迎へられる者との心事の相違はとにかく、山陽は廣島出發後、三日目に、年末の二

十九日、神邊に到着した。その夜、睡られぬままに作つた詩にも、「宿志」を歌ふ山陽であつた。

萬里の江湖宿志存す。
身は炙鶴の籠樊を脱するが如し。
頭を回らす故國は白雪の下。
迹を寄す夕陽黄村の村。
絃誦幾時か父執に從はん。
煙霞到る所すべて君恩。
二十年、事の溫飽に酬ゆるなし。
深く愧づ相知、犬豚を嗤ふ。

それとは知らぬ茶山は、山陽の才分に感じ「文章は無雙也。」と萬事を山陽に委せ、姓も改め姪と娶はせて養子とし福山藩主阿侯に仕へさせようといふ考へである。そこで山陽は大いに驚き七月二十六日、長文の手紙を築山棒盈に送り、「此處へ參り居候も京大阪に居候も五十歩百歩の違に候へば、同時に候へばきらびやかなる處へ罷り出で、一本立候事」「京大阪に浪人立居り候へば却つて自由に相成申し候。此處に彼是と月日を積り候内、菅先生養育と恩義は日々に重り候

て、去り難く相成り申すべく、さりとて多年の念願、無に仕り候も殘念至極、申計もこれなく、如何仕るべくやと案じ煩ひ、當州へ參り候てより、下地病氣增重仕り食事も大に減少仕り、肉脱仕り候やうに御座候」「又高飛を仕候事、如何これあるべきや、何分尊公樣御了簡にてよろしく御取計らひ遣はされ、私生涯の大望御遂げさせ遊ばされ候はば、此御恩生々世々忘却仕るまじく候」と訴へて、既に茶山塾を脱出の決意を表明してゐる。

更に山陽は、「菅茶山先生に上るの書」を茶山に呈して「襄として禽獸たらしめば則ち可なり。苟くも亦人也。則ち何の心か之を處せん。亦何の面目を以て天下の人に見えん」と斷乎たる決意を述べたので、茶山は直ちに春水に手紙を出して、春水も茶山も説諭したがその效はなかつた。ひとり築山捧盈のみは山陽に同情して春水を慰めてゐるうちに、文化八年二月八日の夜から、山陽の姿は茶山塾には見られなくなつた。いかに茶山が山陽の脱出を憤つたことであらう。茶山は親友伊澤蘭軒に與へた「追啓御覽後御火中」の手紙に大いに山陽を罵つた上、そして「勿論事大になり、言てかへらぬこと、我兄御身の落度となりそふに候はば御用心下さるべく候。か樣に申しあげ候こと備後へはいよいよしれぬがよく候」と書いてゐる。

山陽は福山の伊澤蘭軒の家に寄り、それから備中、播磨を經て、大阪に入り、大阪文壇の覇者

中井竹山兄弟を訪ねたが「不孝者」呼ばはりで冷遇され、その他の父の友人を訪ねてもいづれも「不孝者」「放蕩息子」としてつぶさに冷遇された。その間に旅費に窮し、自棄の結果は花街に遊び、無錢遊興を面罵する樓主の前で十枚の書を作り、これに手紙を添へて本願寺別院で說法中の雲華和尙に呈すると和尙は直ちに使に三十兩を渡し、いぶかる聽衆に天下第一の英傑山陽先生の書であると知らせたので忽ちその名は大阪市内に響き渡つたとか、大阪で芝居の幕曳となつたとかいろいろの噂を生んだのはこの時である。

この四面楚歌の中で、唯一の知己は大阪の町人學者篠崎小竹であつた。山陽は小竹の家に世話になつたが、小竹は「外史」の初を見て自ら一部を寫した程であつた。當時のことを書いた小竹の文にて子成の始めて西より來るや、單衣双鯽、牢落肅然たり。人甚だ重んぜず、予則ち推服心醉し、其の外史を借覽し、一部を手寫す。子成曰く、朋友著はす處、自ら寫すを憚らず。眞に知己なりと。」書いた。

小竹は徂徠學者で養父三島とともに梅花莊といふ塾を開いてゐた。養父と春水とは友人であり、小竹は山陽より一つ年下であるが、山陽が江戸遊學の途中、篠崎家に一泊した時に逢つたのが最初で、その後逢つたことはなかつたが、その後も小竹は山陽にとつて無二の親友となり、

後に山陽が詩鈔を出版する時も、序を托したのは小竹のみであつた。

山陽は大阪滯在數日の後、篠崎小竹から京都の蘭醫小石元瑞への紹介を貰つて、憧れの京都に上つた。

4、山陽塾

山陽が憧れの京都に入つたのは、文化八年、(山陽三十二歳)閏二月二十日のことであつた。かつて十年前、鄕里を脫出して福井新九郎宅に潛んだ思ひ出の京都は、歷史の都であり詩の都であり、桓武天皇以來の帝都であり、新日本への思想の胎動する勤皇の都である。山陽は京都に入つて先づ小石元瑞を訪ね、その案内で多くの知人に紹介され、新町丸太町に家を借り、元瑞を監督顧問として二月二十三日から山陽塾を開いた。當時の京都には、大阪ほどではないが、塾も少くなかつた。村瀨栲亭、佐野山陰、海保靑陵、などの儒者が、それぞれ門戸を張つて互に覇を爭つてゐたので、田舍から出たばかりの山陽の開塾は容易なことではなく、生徒も始めは澤山は集らなかつた。しかし彼は生活の問題もあり、塾の講義のみでなく、諸方の出張講演にも出掛けてよく活動しよく稼いだ。それを見て村瀨栲亭などは山陽を自分の門下に引き入れようとしたが、山

陽は大阪の小竹に與へた手紙に「當地にては交友少く、村瀬などよりは手を廻し引寄せ候やうに致し候へども、其地老先生の訓を守り、幟一隅を樹て降參を肯んぜず候」とある如く、あくまで旗幟鮮明に孤城をまもつて獨立したのであつた。

しかし、山陽の茶山塾脱出から大阪に居る間の惡評は、たちまち廣島にも聞えてゐた。小竹から山陽が京都で開塾したことを知らせて來ると、春風は樣子を見屆けるため京都に上り、山陽に將來のことなど訓戒して歸鄕した。その頃、山陽は春風に手紙を送つて、父や、築山捧盈、菅茶山などへの謝罪のことを依頼した。春風は大阪での遊蕩の模樣なども聞いたけれども、篠崎小竹の人物を信じて安心して歸り兄春水にも辯護に努めた。かうして親友小竹を通して、鄕里との間も次第に軟らぎ、二年後の文化十年三月には、父春水も孫の餘一を連れて有馬溫泉へ湯治を名として上方に來ることとなつた。山陽は父を出迎へのため大阪に下り、小竹の家で親子は四年目に對面し、そして父を案内して京都見物もさせたので、父もすつかり安心して歸鄕した。

山陽も開塾當時は「とかく在國の時とは違ひ、一錢遣へば一錢だけ不足になり、自身の難儀に御座候」といふやうな生活であつたが、次第に弟子も增し、文化九年には姫路や播磨まで潤筆の行商にも出掛け、寸暇なく働いたので、父を迎へる頃には多少の貯蓄もあり、まづ「二三年來、

人に義理をかき候程の事はこれなく、不悉所生の志は隨分たしかに候。先今日にては取つつき候て安心仕居候」といふ程度の餘裕ある生活となつたのである。

彼は父を京都に迎へた文化十年の九月から年末まで、美濃、尾張、伊勢と潤筆旅行に出かけたが、この旅行ではじめて問題の女詩人江馬細香に逢ひ、また彼が愛弟子、後藤松陰を得た。

山陽もいよいよ生活上にも學問の上でも獨立の地位となつたので、妻帶をすべく決心し、愛人、江馬細香の父蘭齋に細香女史と結婚のことを申込んだが、蘭香は當時はまだ山陽の眞價を知らず細香の意志を確めるまでもなくこれを拒絶した。しかるに子の心親知らず、細香は後にこの事を知つて失戀の悲歎に沈み、その後は山陽の唯ひとりの女弟子として清い交りを續け、遂に生涯、を結婚することなく一生を終つた。

山陽は仕方なく細香を斷念し、小石元瑞の紹介によつて、京都の或る煙草商の娘と見合することとなつて小石家で待つたが、その時間になつても娘は來ない。山陽はこれを拒絶し、その時給仕に出てゐた小石家の女中、利影の擧動を見込んで結婚、文化十一年、山陽三十五歳の二月から同棲した。利影は近江國西大路村大崎嘉兵衛の女で當時十八歳、小石の養女として入籍した。山陽の目は違はず彼女は山陽にとつて良妻、また勤王の志士三樹三郎の賢母として世に知られた婦

人である。その翌月、美濃の江馬細香も京都に來て、共に嵐山に遊んだ。山陽塾にも、いよいよ待望の春が來たのである。

この年の八月、山陽は五年振りに歸省したので父春水との間も和解された。この歸省の途中、神邊に寄つたが茶山は江戸ゆきの留守で逢はれなかつた。しかし、往復とも各地で歡迎せられ、市河寛齋、田能村竹田、姫井桃源などに逢つて大いに語り、十二月上旬、京都に歸つた。

あけて文化十二年、山陽三十六歳の正月、義弟の景讓が二十六歳で逝き、山陽の子の余一は十五歳にして春水の相續者となつた。四月には父春水が病んだので彼は再び歸省した。しかし、父の病狀もさほどにもなく、二三日滯在して京都に歸つたが、翌文化十三年の春二月十八日、姫路の仁壽山學問所で「莊子」を講義中、父危篤の急飛脚があり、急遽出發、晝夜兼行で廣島に著いたのが二十四日の朝、しかし父はすでに二月十九日に歿した後であつた。歿年七十一歳。孝子山陽はこれから再び「莊子」を講じなかつたとはあまりにも有名な逸話である。廣島滯在一ヶ月の後、京都に歸り、それから三年間は喪に服し、ひたすら父の祭祀と母への慰問につとめた。服喪の間は、毎日父の佛前に祈り、魚肉を絶ち、そして妻を斥けて心の底から、過去の不孝であつた自分を反省し、父の靈を弔つたのである。

當時、山陽の京都における地位は次第に高く、かの日野資愛公に招かれたのは文化十二年、すでに京都の文壇を睥睨してゐた。そして服喪の間にも、修史への努力に怠りはなかつた。

5、遊　歴

文政元年、山陽三十九歳の二月には、父の三回忌のため廣島に歸つた。法事を終ると、彼は、一門人後藤松陰を伴ひ三月はじめ廣島を出發して九州に向つた。當時の學者は今日の學者が洋行でもするやうに、必ず一度は長崎に遊んで洋風に吹かれて來るのが例であり、彼等はまたその往復で廣島の賴家に立寄るのが例であつた。山陽もこれ等の人々から九州の話を聞かされてゐたので、何といふ目的もなくとも一度は九州へと考へてゐたのであらう。

九州遊歴は旅行好きな山陽の一生中の大旅行であつて、一ノ關から博多、佐賀、長崎、熊本、薩摩に行き、再び肥後に返り、豐後、豐前を經て下關にと、約一ヶ年で九州を一圓したものである。

九州旅行の第一の收獲は詩であつて、有名な「天草洋」「筑後河」「前兵兒謠」などの傑作をはじめ後には「耶馬溪圖卷記」などが大作を得た。詩作の外に名勝、舊蹟を探つたのはもとより、

この旅行中、博多では龜井昭陽、長崎で古賀穀堂、豐後で田能村竹田、廣瀬淡窓、豐前で雲華などといふ諸名士に逢つたことは、彼にとつて得難い人間修業であり、活學問であつた。

そしてこの間、鎖國日本の唯一つの開國の窓である長崎に二ケ月も滯在したといふことは、そこに取立てた收獲がなかつたとしても、意義深いものがある。彼はまた例によつて、人間山陽らしい逸話の數々を、九州一圓にばらまいた。下關での廣江殿峰の家で灘の「鶴」を飲んでから初めて酒徒たるの洗禮を受けたこと、また旅行中もひとり京都に孤閨を守る愛妻梨影に思ひをはせ「遙に憶ふ香閨燈下の夢」と歌つて、菅茶山に「子成四十にして情痴未だ醒めず」と評されたこと、長崎で「家に縞衣の吾が返るを待つあり、孤衾水の如く三年」と歌つて誘惑を拒否したことなどは、人間山陽の半面を語るものである。

九州旅行中に獲た詩の中で、すでに「ナポレオン」は擧げたが、その他二三有名なものをあげて見よう。

天草洋 其の一

眠は驚く、船底、塞潮の響。天草洋中、夜、櫓を繫ぐ。
太白一星、光、月に似たり。波間、照し見れば、巨魚跳る。

天草洋 其の二

雲か、山か、吳か、越か。
水天、髣髴、青一髮。
萬里、舟を泊す、天草洋。烟は、篷窗に横つて、日漸くに沒す。
瞥見す、大魚の、波間に跳るを、
太白、船に當つて、明、月に似たり。

筑後河

文政の元、十一月。吾れ、筑水を下り、舟筏を僦る。
水流、箭の如く、萬雷吼ゆ。之を過る、人をして、毛髮を竪てしむ。
居民、何ぞ記さん、正平の際。行客、長へに思ふ、己亥の歳。
當時、國賊、鴟張を擅ままにし。七道、風を望んで、豺狼を助く。
勤王の諸將、前後、沒し。西埀、僅に存す、臣武光。

遺詔、哀痛、猶耳に在り。龍種を擁護して、生死を同うせん。
大舉、來寇す、彼れ何んぞ。誓つて、之れを剪滅して、天子に報じまつらん。

河は、軍聲を亂つて、枚を銜むに代へ。刀戟、相摩す、八千師。
馬、傷つき、冑は破れ、氣ますます奮ふ。敵を斬り、冑を取り、馬を奪つて騎す。
箭を被ること、蝟の如く、目眥は裂く。六萬の賊軍、終に挫折す。
歸來、河水に、笑つて、刀を洗へば。血は、奔湍に迸つて、紅雪を噴く。

四世の全節、誰か儔侶。九國、逡巡す、征西府。
棣蕚、未だ肯て北風に向はず。殉國の劒は、乃父より傳ふ。
嘗て、明使を郤けて、本朝を壯にす。豈、恭献と、日を同うして語らん。

丈夫、貴ぶを要す、順逆を知るを。少貳、大伴、何の狗鼠ぞ。

河流、滔々として、去つて還らず。遙に、肥嶺を望めば、南雲に嚮ふ。
千歳の姦黨、骨亦朽つ。獨り、苦節の、芬芬を存するあり。
聊鬼雄を弔して長句を歌ふ。猶覺ゆ、河聲の、余怒に激すると。

九州旅行を終へた山陽は、文政二年二月、廣島に歸り、母を奉じて京都に歸つた。途中、神邊の師菅茶山にも逢つて、師弟間の積年の感情のわだかまりも緩和したやうである。
これからは、ひとりの母への孝行のために、母を伴つて或は嵐山、島原、或は芳野山、或は琵琶湖と遊歴し、四月には母を送つて廣島に歸省した。
文政三年、四十一歳の時、梨影との間にはじめて辰藏が生れたが、不幸、三歳にして夭折、同六年には又二郎、また八年には三樹三郎が生れ、家庭もいよいよ順風に向ひ、京都に於ける聲望も次第に高まつた。門人の中にも、後藤松陰をはじめ、牧白峰、江木鰐水、藤井竹外、森田節齋、關藤藤陰、村瀨太乙等があり、江馬細香もその後も度々上京して、山陽とともに各地に遊歴

した。彼はもはや京都の山陽ではなく日本の山陽としてその名は江戸までも響いた。

文政五年、四十三歳の時、三本木にいよいよ假宅を建てて水西莊となづけ、いよいよ、讀書、遊歷の外、畫や園藝にも親しみ、悠々自適の生活に入つた。

文政七年、母を迎へて廣島に送つて以來、文政十年の母と杏坪との吉野山行、同十二年の伊勢參宮、箕面の看楓など、數ふるに遑あらず、卅五歳の時の第一回の歸省以來、死の前年五十二歳まで十回も京都廣島の間を往復して母を慰めてゐる。かくて史家山陽の外に孝子山陽の名は、日本孝子列傳の中に輝いてゐるのである。山陽は、ただに父母の名を表はすといふ孝經のいはゆる孝の終を完うしただかりでなく、母の肩を揉み母を背負うて、孝養到らざるなき大孝の人である。四十以後の山陽は、孝道を日常化し、孝行を年中行事とした。ひとり日本歷史を作り直したばかりでなく、札附山陽の個人の歷史を行をもつて作り直した彼こそ、眞の歷史に生きた人であり、學問の道を大成した人であらう。

孝子山陽の詩には次のやうなものもある。

書　懷

鴨水潺々として、月、林にあり。

病來、節候たちまち侵尋。
虫聲、屋を繞り、秋の及ぶを知る。
樹影、階に升り、夜深きを覺ゆ。
著作は人の意を託するに堪るなし。
家卿、母あり、毎に心に關す。
茫々たる身世、誰に憑つて計る。
悄倚、殘燈、獨吟に伴ふ。

五、晩　年

1、死闘の著述

晩年の山陽は母への孝養とともにその著述の大成に心血を傾注した。四十三歳、三本木に移つた年、父春水の遺稿を校訂しそれの出版までにまた非常な苦辛を拂つた。父春水の遺稿には、若くして世を去つた義弟景讓の遺詩も手を加へて附刻した。彼の孝心はひとり母にのみ注がれたのでなかつた。

文政九年、四十七歳、畢生の事業たる「日本外史」は殆ど完成した。かくて翌文政十年、山陽四十八歳の年は、史家山陽の生涯を記念すべき年で、五月松平樂翁に「日本外史」を献じ、十二月には松平公から外史献上の返禮として白銀二十枚と集古十種二函とをおくられた。

此年からいよいよ最後の大著「日本政記」の編纂に着手し、翌年十一月「日本樂府」が出來あがり、その翌文政十二年正月には、松平公の「外史」推薦の辭を賜ひ、山陽の文名ますますあが

り、四方からの訪客踵を接し、應接に遑なき盛況であつた。川北溫山の詩に、

東方赫々、天明に屬す。
ただ見る葵心、日に向ふて傾く。
五畿七道、山河改まる。
叱咤の聲、萬歳の聲を爲す。

とあり、當時の山陽の歌にも次のやうに明朗なものがある。

我がやどは川の西なる村柳、とめて尋ねん君をこそまて、

天保元年正月には「日本政記」の著述は、既に延喜年代まで進んでゐた。「日本政記」は父春水の遺業たる「懐古錄」を繼ぐものであつて、「日本外史」の姉妹作である。しかしながら、山陽の餘命は、これを完成するためには、十分とは云へなかつた。かくして史家山陽の最後のページをかざる決死の闘爭が展開されたのであつた。

なほ山陽には、大作「日本政記」の著作のほかに今一つの設計があつた。それは、「江戸」への雄飛であつた。既に傑作「日本外史」によつて天下に名を成した山陽が、十八歳の青年時代、ただ一度上つただけであり、また風評まで立てられた江戸に、再び捲土重來しようと考へること

は、當然であつた。殊に天保二年、長子聿庵の江戸行を京都に迎へ、「驛程、指を屈すれば何の邊にか到る、連晴、知る汝が行、滯りなきを。」とそれが父子の永訣とならうとも知らず東に送つてから、いよいよ自分も江戸に出て最後の一大奮闘を試みようとした。天保三年正月、江戸にある彦根藩の家老小野田簡齋への手紙には「當春、詩佛死なぬ間に一度江戸へ參るべきやとも存じ候。尊公御在江戸之內更妙と存候、如何決せず候」とあり、同三月の聿庵への手紙にも「東遊の事、縷々申越され、此方よりも止めると申遣候上なれば、か樣にくどく申越されるにも及ばざる事、たとひ遊び候とも本邸に同居などと云ふ事は、とんと思ひよらざる議なり、其許、官邊の邪魔になる事、意味合は拙もとくと存じ居り候也、何にせよ止め候上なり、煩言に及ばず」とあるから、江戸行きは山陽の最後の希望であつた。

ここに「死なぬ間に一度江戸に參るべきや」と、書いたのは歿する年の正月であり、八月には「彼の國朝政記、未落成だけが殘念故、それに晝夜がかり、生前に整頓いたし置きたく」といふ手紙を書いてゐる。やはり死の豫感はやくも偉人の胸に迫つて來たものであらう。

天保三年といへば山陽はまだ五十三歳、人生はまさに「これから」といふ時であつたが、この春からは、とかく健康がすぐれなかつた。この年の夏、彦根への旅行後、彼は「政記」の稿を進

めつつあつたが六月十二日、突然咯血した。驚いた夫人梨影の知らせで、親友、小石元瑞が來診した時も、彼は決して政記の稿を手から離さうとはしなかつた。小石から不治の重病であると宣告されても少しも驚かず、彼はただ「政記」その他の著述の完成までの餘命を念じ、「咳血の歌」などを作つて、自ら勵ました。

その後、度々咯血があり、遂に兼起覺束なしと知つた山陽は、「日本政記」の原稿を關藤藤陰、牧善助、菅三郎等の門弟に示して淨書させることとし、自分は他の論文を執筆した。しかしその後も病狀はますます重く到底、自ら最後まで筆を進めることは不可能であるから、殘つた評論の部分だけの執筆を急ぎ、他の記事の部分は門弟關藤藤陰に賴んで書かせることとした。この間の消息を、關藤藤陰が後に聿庵に與へた手紙にかう述べてゐる。

「其後四五日を經て御病狀聊宛か御快きやうにならせられ候故、塾生へ議論の處淨錄仰付けられ候譯に候。定日も一二三篇づつ御刪正にて三四人掛り寫し上候、殘る記事になり候處、御原稿も誠に讀兼ね候樣に相成、中々餘程御手入られず候ては、誰でも見寫候にはこれなき樣に御座候處、八月八日私へ御仰付けられ候は、記事になりて續きものゆえ、人に託され候事は却て宜しからず、其の方一人に任するゆへ、其方著述をする心持にて、所々に年月事實相正し淨錄

致すべく、是は外史と違ひ、板刻になり候もの故、上木して當方子孫の家德に殘し置きたき素志なり。上木候時は其方の名は拙者の次へ並出すべし、千載滅びず候事、夫を樂みに以來何事も打捨て、專ら是へ掛りくれたく候と御申し、謹みて承知奉り、翌九日より創業、日本史、皇朝史略、國史略、編年小史の類、左右に控、年月、事實、書例を一々吟味、淨錄に掛候、（中略）時に政記は右の通ゆへ、外史等の如き、先生十分に御鍛錬を御經遊たりとも申しがたく、淨錄往々、不審質問、別紙にて張紙申上置き候へども、夫さへ御申聞かせ定草これなき位の氣味に御座候。十分相濟居り候は議論位なり。云々」

「政記」はすでに記事も元龜元年の姉川合戰の處までは出來てゐたが、その後も藤陰の書いたものを一々目を通すつもりであつた。しかし、それは山陽の生きてゐる間には出來あがつたけれども、その時、もはや彼にはそれに目を通すだけの氣力はなかつた。しかも、彼が死期を早めた原因となつたのが、彼が決死的雄篇たる「正統論」であつたことを思へ。

九月九日は重陽である。病床にも梨影女史が心をこめた菊花が挿されてあつた。彼も小康を得てこんな詩を作つた。

重　山

山妻、菊を買ひ、體に對して斜なり。
知る、是れ重陽、我が家に到る。
一病因循なほ死せず。
今年、また黃花を看るに及ぶ。

しかるにその夜、猪飼敬所といふ學者が、伊勢に行くので告別のために山陽を訪ねた時、山陽も病を忘れて大いに史論を戰はした。殊に北朝を正系とする猪飼の意見に對し、山陽は猛然と南朝正統の持論を展開し、「然らば君は楠正成や新田義貞を亂臣賊子とするか」とつめより、「目張り眉斬り、慷慨激切」して激論した。門弟達もあの病體のどこからあんな烈しい氣力が迸り出るかと怪しんだ。それにつけても山陽は、「正統論」だけはどうしても書きあげねば死に切れぬ思ひで、それからは俄然、惡化した病勢と戰ひながら、門弟の止めるのもきかず最後の力を「正統論」に注ぎ、咽喉にからんで來る痰を吐き、つぎつぎと出る咳をふくんで、震へる手に鞭つて執筆した。それこそ文字通り死の挑戰であつた。かくて一枚々々と門弟が淨書して出來たのが、「政記」の後に置いた「正統論」である。山陽は文章を作る法を戰法と同一視し、文士は國家のための戰士であると考へたが、彼は文字通り机の上を戰場とし文章報國の第一線に倒れたのである。彼の

歴史書こそ、言々句々、ことごとく山陽の血涙の書である。

山陽の病氣のことが聞えると文人墨客の見舞客は各地から殺到した。九月十七日には、大阪の篠崎小竹、後藤松陰の二人の見舞があり、その夜、彦根にゐた梁川星巖も江戸行の途中、最後の告別に見えた。その頃はなほ、詩を作つて友と歡談してゐたのであつた。小竹に與へた詩には

、喜んで聞く吾が友の聲。
疾を力めて笑つて相迎ふ。
筐裡新著を出し病來、課程を成す。
丈夫、知己在り、生死、向前の行。
酒あり、君、姑く住せよ。
嫌ふを休めよ艤を共にせざるを。

なほこの時にも猪飼との正統論について小竹に語つたものと見えて、小竹の跋に、

「子成大に余が疾を問ふを喜び、且つ南北正統論を出し、辯じて曰く、猪飼翁は當時の巨擘、而して此の言を出す、細事に非ざるなり。僕羸めりと雖も、辯ぜざるべからず。……是れ稿本なりと。……子成咯血自ら起たざるを知り、晝夜筆をとり、其の政記十數卷を綴り成す、衆醫

諫め沮めども聽かず。君達侍り奉ず。隨つて寫す。子成喜んで曰く、此子吾業を助け成す者、因て此藁を授くと、稿君達に在れば、乃ち道を傳ふるの衣鉢。」

とある。

かかる苦鬪の間にも、最後の日まで、遺族の生活のことまで何かと考へ、自分の病氣のことよりも廣島の母のことを考へる山陽であつた。德富蘇峰氏が「彼に多くの敬意を抱かざる者も、六月十二日咯血以來、九月二十三日易簀迄の擧動を見れば、何人も彼に對して脫帽するを禁じ能はぬ」と云はれたのは至言であらう。

梨影の手紙に「御せいしんは少しもはじめよりかはり申さず」といふ精神力をもつて、なすべきことをなした山陽は、自若として最後の日を迎へたのである。

2、終焉

天保三年九月二十三日は、五十三歳を一期とした文豪山陽が終焉の日である。この日、暮れ六つ、なほ「日本政記」の稿を止めず、眼鏡をかけたまま眠るが如く往生を遂げた。まさに學者の討死の姿であつた。この大往生については、木崎好尙氏の「賴山陽先生」の次の一節に委しい。

「九月廿三日といふ日が、そこにあつた。氣先は「息切れがするやうな」といふだけであつたが、「けふは、早い目に見舞うてくれと、小石へ、さう言つてやれ」と梨影はいひつかつてゐた。併しこれといふ異變も見えなかつたが、午後になりて、突然と「遺言や、何か書きたいから、卷紙をつがせて置け」といはれて、塾生菅三郎白牧がそれに取りかかつてゐた。

それを聞いた梨影は、急に胸ふさがりて、牧の塾へ又二郎を、兒玉塾へは三木三郎を呼びにやつたが、その使と行違ひに、善助が見舞に來たところへ、二人のこどもも戻つて來た。

在塾してゐる關五郎藤陰が、やがて、病室へ呼ばれた。

「政記の原稿はどれだけ出來たか」

「けさ程迄にすつかり出來まして折角清書にかかつて居ります」

と彼は手に持つてゐたのを出さうとしたが、それは亂雜に書きなぐつたままで、重患の先生にこのままお見せしても讀みにくからうと、一枚々々それを繰りひろげて枕頭へにぢり寄つた。

「清書は出來ても、もはや加筆する力はない。此方の書いた前のつづきへ、そのまま續けて置いてよろしい、只急ぐのは此方の跋をまだ清書して居らぬから、あれだけ清書して見せてくれ」

五郎の寫字室としては、山紫水明處が、それに充てられてゐた。彼は、手早くそれを清書して、いそぎ病室へ引返し、

「わかりにくいところは、そこだけ字を明けて置きました」

とそのまま差出すのを「さうか」といひつつ眼鏡をかけてそれを手に取り、

「この字か、これは……といふ字ぢや。」

と一々書き入れさせて、さも滿足らしかつた。

五郎も、それで安心して、一先引取り、水亭へ戻り、政記の結構を清書するつもりでゐたが、何となく胸さわぎして、日も早や落ちかかり、そこらあたりが急に暗くなつたまま、そま引返して、ぢつと枕邊に坐つてゐた。

その時、病室には、梨影を始め、幼ない又二郎と、善助共に三人の外、誰もゐなかつた。三木三郎は、いつの間にか、表へでも遊びに出たらしかつた。そこへ三郎が、今しがた看護の末森三輔と交代して這入つて來た。

その刹那の一刻、病體から「あつい〳〵」といふ聲が聞えて、苦しげに身悶えの樣子であつた。からかみも、屏風も、みな取り除けよとの指圖に、その病體を動かしては、よくはあるま

いと、皆は兩側へ分れてともゞ〳〵背筋から腰あたりを撫でさすつてゐる。

そこへ、あたふたと、小石の來診を迎へた。それと見るより「けふは、チトいけない」「それではサフランを上げませう」と藥籠から、その用意をしてゐるうちも、「もつと、そこをさすつて」——皆は無言のまま、それ〴〵の手を休めなかつた。

五郎は、水亭が不用なので、そつと寫字室へ引返してちらかせてある書き物をまとめ、雨戸を繰らうとしてゐる所へ、「五郎さん〳〵」と梨影の聲がした。あわてて來た五郎は、脊中へ手をやつた。腰のあたりには、梨影の手があつた。

善助は、元瑞と二人、別室で、何かひそ〳〵話してゐたが、つと引返して、五郎に何やら耳打ちする。今夜が危險と、元瑞の見立を取り次ぐのであつた。兒玉三郎旗山も、そこへ駈け着けたが、ふだんから病室へ多勢詰めかけるのは、おきらひだ、それ以外には、人を入れぬこととした。

暮るるが早い釣瓶落しの火ともし頃に、うす暗い行燈の火先は、さびしく吹風む風に煽ちて、病室はただひつそりとしてゐた。その沈默を破つて、

「五郎」

と呼び立てられたのを、梨影が引取り、

「お脊をさすつてをります、五郎さんは、」

そのまま言葉は杜絶えて、そこに坐つてゐる又二郎の手を取るやうなけぶらひが見え、又二郎はそのまま片手をさしのべたが、それもそのまま病床には何の變りもなかつた。

さしうつむいたまま、一心に脊へもたれかかるやうに、五郎はその手を休めず、ふと顏を前の方へ向けて一目見るなり、

「あ、先生のお眼が」

と思はず言葉を出したのは、ひとみが上づゝてゐるのに氣がついたからであつた。それを又二郎も見て取つたのであらう、びつくりしたやうに、大聲を擧げて、

「おとつさん〳〵〳〵……」

と呼びつづける。初めの一聲だけは、何やら受け答へもあつたらしかつたが、あとは齒をかみしめ〳〵、何のいらへもなく、只打ちうなづいた風にも見えた。

梨影は、手早く水をくくみて、そのまま口元へ吹き込み〳〵つつ、

「三木を早く、三木を……」

下女は表へいそいで、娘陽子ともゞ〳〵連れて戻つた。善助と兒玉三郎は口々に、

「先生々々……」

と七八度づつも呼びつづけた。呼吸は早や絶えてゐた。

宮原謙藏節庵は、連夜の看護に、この夜は寓居へ引取つてゐた。

指圖通り、菅三郎が接いでおいた卷紙は、そのまま、白のまま、枕元へ置かれてあつたが、その日の八ツ時頃、人を遠ざけて、梨影の耳には遺言の聲があつた。暮の正六ツ時、近く逐し、鐘のひびきが東山あたりから。」

生きてゐる間の山陽は國民の教育者であつたが、彼の死そのものがまた教育的討死であつた。當時、梨影は卅六歳、又二郎は十歳、三樹三郎は八歳、陽子三歳であり、廣島にある母梅颸は七十三歳、江戸にある聿庵は卅二歳であつた。山陽の父春水は七十三歳で死に、母梅颸は八十四歳の長壽を保つたことを思へば、山陽の五十三歳の死は先天的といふことは出來ないであらう。しかし、徒らに馬齢を數へて人生の意義を品評することは出來ない。彼が短い生涯にいかなる長壽者を以てしてもなし難きをなし遂げた業績を思ふときは、山陽こそ天壽以上を完うしたものと

いふことが出來るであらう。

彼の遺言によつて遺骸は、京都東山長樂寺の後山に埋葬された。東山に眠る彼の靈魂こそ、永久に國民文學の守護神となるであらう。

第四章　山陽の教育觀

一、廣義の教育

教育を、廣義のそれと狹義のそれとに分けて考へた時、山陽の教育的價値は、塾とか、學校とかいふやうな限られた教育よりは、ひろく國民全體の教育者であり、むしろ社會教育家といふべきであらう。彼は單に文化文政期の國民教師であり、また明治維新の志士達の精神の教師であつたばかりでなく、國民の教師としての山陽は永久にその業績の上に生きてゐるのである。

しからば如何なる點に於て彼は、國民を教育するのであらうか。

その第一はいふまでもなく、歷史の文學化であり、國民の人間化である。それについては、既に本書の前半に於て繰返し論じたところであるが、わが國には古事記、日本書紀の昔から歷史の書物は少くなかつたが、多くの國民に愛讀され味讀された點においては、恐らく、山陽の「日本

外史」を凌駕するものは、空前絶後といふべきであらう。更に菅公の昔から、漢才の學者は少くなかつたが、これほど漢學を日本化したものは、これまた空前絶後ではないか。漢字制限論や漢文の全廢論を唱へるものさへ出現してゐる現代の國民は、漢文を讀む力においては、決して優れてゐるとは云はれないが、さういふ昭和の國民にさへふしぎに解る漢文や漢詩は、山陽の作である。これは山陽の漢文には、彼の純日本的な血液が流れてゐるからである。

山陽の歷史研究は、その材料の貧困と研究の粗雜さのために、怪しいものとの定評がある。しかしながら、彼の偉大さは、日本歷史の殼を破つた點にある。歷史を草莽のものたらしめるためには、この堅き殼を破ることが、絶對に必要であつた。彼はその主張が、勤皇論で貫かれてゐるばかりでなく、その表現そのものが勤皇のための作文であり、勤皇の精神を全國民の胸奥にまで持込むための勞作であつた。彼は考證や詮索を事とした四角四面な歷史家ではなかつた。彼は歷史家ではなくて、歷史人間であつた。歷史の精神を、國民に生きて働くものとして神移しする歷史人であつた。國民の前面にしつらへられた、高座に立つて、鹿爪らしく歷史を說くことは一切の特權をかなぐり捨て、無位無官の布衣の身となり、國民の間にあぐらをかいて語る歷史家である。床屋政談といふ言葉があるが、彼の史談は床屋史談である。そこには若干の誤りもあらう。

しかし、一たび彼の筆を通じた歴史の精神は、熱となり火となり、脛なくして千里を走つて全國民の間に電波するのである。この意味で、彼は社會を歴史的に教育する天才であつた。

第二に彼は、明治維新の原動力となり、維新以後の革新日本を育成する國民詩の作者として、直接、現代日本を教育してゐるのである。山陽の勤皇はいはば評論の範圍に止まり著述の上に局限されてゐたが、この父の勤皇思想を身を持つて繼承し、體あたりに實踐したものは頼三樹三郎である。父は詩的直感をもつて勤皇思想を表現し、子は逞しい實踐の上にそれを表現した。三樹三郎は山陽の第四子にあたるが、性行ともに最も父山陽に似て居り、文士山陽を志士山陽に再生させたやうであつた。父の史論を空論たらしめなかつた三樹三郎は、これまた父と同じく忠孝兩全の人である。

山陽精神は直接には我が子の實踐によつて、次代に繼承されたが、山陽の門弟の中にもやはり師の精神の傳承を觀ることができる。山陽の門人に森田節齋があり、節齋の門人に吉田松陰ありといふ風にその精神は明治維新の原動力にまで培ひ繼げられた。更に山陽の詩文は、維新の志士達にとつては慷慨驚世の進軍歌となり、また維新後の新興日本を背負つて立つた人々、例へば伊藤博文、大隈重信などといふ人々の精神的武器となり新日本の國民教科書となり、更に、今日に

於ても、青少年の教科書として、絶對に代用なき役割をはたしてゐる。現に菊池寛は、近著「新日本外史」に序して、「新日本外史」といふ名も、頼山陽の名著に對し、いささかくすぐつたいのであるが、頼山陽の日本外史も、元來一文人の野史と云つた意味で、謙遜な命名であると思ふのである。山陽の命名當時の心境に眞似たのであつて日本外史の史書としての功業に比せんと云ふ意味ではない」と云つてゐるが、ここにも昭和の今日、なほ山陽はわが文壇に身近く生きて迫るやうである。

山陽の著述は、親房の「神皇正統記」とは違つて、國亂れて出る忠義の書ではなく、恰も元祿時代に義士が武士道を顯揚したやうに、文化文政の太平時代に、武士道の眞髓を發現せしめたものであり、治に居て亂を忘れざる日常士道の文章である。かつ、その武士道や勤皇精神は、單に軍人の士道や勤王ではなく、ひろく全日本國民の日常の道であり、特にジャーナリストには文章報國の大義を示し、文士には文人のさむらひ精神を明示したものである。新しい歴史の再檢討が叫ばれ、皇民の餘り直しが要望され、新しい國民文學の要望される今日は、まさに山陽精神の復興期であらう。

山陽はその當時にあつては、一個の「迂拙男兒」であつたであらうが、百數十年後の今日こ

そ、「此の迂拙男兒を念ふの時」が來たのである。そして百年後にも千年後にも念はれるところに、時代の教育者としての彼の不朽の生命がある。

第三に彼は、修身倫理の活模範である。彼が孝子傳中の人であることは、あまりに有名な話であるが、そこには、孝子傳中の型破りとして山陽の教育力がある。

世には山陽の母に對する孝行をもつて、青年時代の親不孝の償還方法であるといふやうに觀るものもあり、ともすれば青年時代の遊蕩や不孝の方面に過分の興味を持ち、それが却つて山陽の人間としての地金のやうに觀るものも少くない。しかしもとより山陽も人間的なあまりにも人間的な人間であつて、倫理の教科書向きに出來た四角四面な人間ではなかつたが、人間から神へ、むしろ獸的人生から神的人生へと進んで行く過程に人間山陽の眞面目がある。よく刻苦すといふもののみ、山陽を知るものである。そしてこの兩面を併せ持つところに、人間山陽が、眞實の意味に於ける倫理的存在となるのである。

山陽は文化八年、京都に入つてから叔父春風に送つた手紙の中で、「小子生得、人に彼是云はれ候性に御座候」とあるやうに、自らも非難されることを認めてゐたが、およそ偉人英傑といはれる人の中で、わが山陽ほど人格的に非難され惡評されたものは少いであらう。

學問や文章に對しても數限りない非難があり、彼の最大傑作たる「日本外史」にしても、新井白石の史論を盜んだとか北畠親房の勤皇論を眞似たとか云はれて居るが、二百騎と書くべきところを二千騎と書いたとかいふやうな大小の非難があり、文章にしても例へば、帆足萬里などは、外史は竹山の逸史に「下ること數等」と評し、「賴生作る所の文章、鄙陋、和習、錯出、加ふるに考證疎漏、議論乖僻を以てす。眞に以て瓶醬を覆ふべし。渠是を以て重名を得たるは、眞に怪嘆すべし。」と酷評してゐる、しかし文章批判にしても、佐藤一齋が、山陽の文章を直したのに對して、山陽は、自分の文章は綿布であるが一齋の文章は絹布である。綿布が惡いと云つて絹布を以つて繼ぐ譯にはゆくまいと云つたといふことであるが、彼の言葉のやうに、山陽は文章も人物も綿布であり布衣であつた。

學問、文章に對する非難よりも、彼の人物に對する惡評は更に酷であり、彼は實に未曾有のデマの集注攻擊の中に、刻苦して未曾有の人格を錬成した人であり、ここに彼が修身倫理の活模範たる所以がある。山陽に關する非難の最大のものは、山陽の師菅茶山のそれであり。茶山塾を脫出したことに對する反動とは云へ、茶山の學界に於ける地位から、この露骨な罵詈はまさに山陽にとつて致命的なものがあつた。

坂本箕山の「賴山陽大觀」には「山陽は、初妻御園淳子と別れた後、永く檻居謹愼の身であつたので固より孤棲、能く情慾を制して居た。然るに一たび出入進退の自由を得てからは、多年抑へてゐた慾望は、心身の自由なる乘じ、漸く頭を擡げ、たださへ多情多恨なる彼をして、遂に一士家の寡婦とラブに陷らしめたのである。彼は其の寡婦の繪姿を懸物にして、目ら詩を作り賛をなし、此處彼處に持ち歩くので、大評判となり、その艶聞は廣島で誰知らぬものなきに至つた。」と述べてゐるが、はじめは「文章は無双也」と山陽に傾倒した茶山も塾を去つた後の山陽について、やはり前記の寡婦のことを書き、「去々年か士家の妻か後家かを姦通いたし其の繪すがたをかけ物にいたし、自身詩にて賛をし、ここかしこもちありき候よし其事大評判」と宣傳したものである。

廣瀨淡窓は後には自分の山陽觀の誤りを訂正したが、初めて山陽を見た時は「當世の名家において第一流なり、余眼中のしる所、此の人より才あるはなし」と評し「唯其人となり簡傲にして禮なく、又、利を貪る。是を以て至る所、人に惡まれ、往々にして其地を逐ひうたれたり、惜しいかな」と述べてゐる。

古賀精里は其の子穀堂に山陽のやうな人間と交るなかれと云ひ「久太郎儀、君父に對し無故大

謬妄、其上今に親切悔悟之樣子これなく、人の才を愛するも程の知れたる事、是等……の如きは、名教之罪人とも申候、故にたとひ驚天動地の名文これあり候も、甚だ斟酌いたしかね候。殊に彼等の所爲は正當の事とも相存ぜず候。世人の稱擧は、長門侯の庸妄狂淫なるを明君と申たるの類に候」と斷じてゐる。

大和の碩學者谷三山と山陽の門人森田節齋との筆談の中にも、「山陽、嘗て大和に十三經二十二史を讀むアホウあり、とて大いに笑ふ、家生の話なる由或人僕に語る、ほんまであるか」とか、「山陽は常に余は五百年に一度生るる者也といいし」とか、佐藤一齋が、「山陽の樣なる不學文盲でなければ名文は書けぬと笑ひし由、是亦理あり」とか、「山陽、十三の時、人南朝をわるく云へば大怒、必ず其人にかきつきしとなり。其の痴は天性なり」とかいふやうに山陽を恰も誇大妄想狂か何かのやうにからかつてゐるのである。

この他、彼が短い五十年の生涯に受けた惡名はまつたく枚擧に遑あらず、札附と云はれ、痴漢と罵られ、狂人と呼ばれてゐる。少くも封建時代の道學や道德的常識から觀て、彼は一個の無道德家であり反道德家であつた。

これらの無數の惡評の中には、彼にとつて全く身に覺えのない揑造も少くなかつたであらう

が、しかし、これらの非難が彼の周圍に存在したといふだけは動かすことの出來ない事實である。毎年のやうに、模範青年よ孝行息子よと選賞されて彼は自分を道德的に仕上げて來た人間ではない。非難と惡評と戰ひながら彼は眞の道德鄉を築いたのである。禍を變じて福となすと云はれるが、彼ほど惡評を自已修練の資料として活かしたものはなかつた。彼は水を飲んで乳とする牛のやうにも、いかなる惡評にも傾聽して自已を大成した。彼が脫藩にしても決して藩主に逆かうがために脫藩したのではなかつた。眞實藩儒たるの道を正さうがために、藩に御迷惑のかからぬ地位に身を置いたのであつた。「日本にて必用の大典とは藝州の書物と人に呼びなし申したく念願に御座候」といふ愛鄉心に出發したのが彼の念願であり、父母に對しても一時の不孝の形によつて、より大なる孝行の境地に到達しようとしたのである。

されば、彼には敵があるとともに、よくその本心を知る叔父があり友人があつた。毀譽相半ばする生活は批評家の常態である。殊に彼のやうに「性、峻峭にして尋常の人を包容する能はず。常に昇平日久しうして、士氣の振はざるを慨せり、故に氣節を以て自ら持し、亦以て人を導き、未だ嘗て已を屈して人に隨ひ、浮沈して容れられんことを求めず」といふやうな氣概の士が、現世に於て惡評の矢面に立つといふことは、むしろ世道人心のためによろこぶべきことである。そ

こに現世の榮達を願はず知已を千載に俟つといふ英傑の心事がある。山陽が死の直前自らの肖像に題した「迂拙男兒ぞや」の詩の後に「これを藏すること二十年にして出視一咲して可なり」と附言したやうに、山陽は現在の俗世間に容れられなくとも、二十年後、百年後になる程と共鳴するものがあれば滿足したのである。

廣瀨淡窓も、山陽が歿してから、自分の處へ訪問した人は數百人にも達するが、山陽と星巖などは最も優れた人物であるとし「今頼襄の名天下を風動す、人共の面を見、而して共の言を聞くを得るを以て榮と爲す。予方さに當時相待の疎なるを悔ゆ。嗚呼山陽逝く矣。」と聊か先見の不明を後悔してゐるのである。

武元北林が「足下の浪遊するや、塗說紛々として、みな足下を以て失心顚狂せりとなす。恒ひとり信ぜずしていふ、我れ嘗て斯人の材器異常なるを知れり」といひ、「翼くばこれを勉め、自愛してその身をあなどるなかれ」と激勵したことや、篠崎小竹父子が四面楚歌の中で山陽を擁護したこと、また田能村竹田が「世に子成を目して、倨傲無禮とするは然らず。子成、物を待つこと極めて厚し、但、每人の所爲、未だ精到ならずして、その心を鑿砧せしむるに足らざるのみ。」と云つたなどは、當時にあつても、彼には知已もまた少くなかつた。百年後の今日、なほ當時の

封建時代の道學者と同じ口吻で、山陽を非難攻擊するが如きは、自らを百年前に後退せしめるもの、東亞共榮圈確立の大國民錬成の時代に今なほ鎖國的謬見を固執するものであらう。

彼が刻苦五十年、血涙をしぼつて築いた人間道德の大道こそ、ともすれば實人生の上に遊離しがちな修身倫理の教に生新な活力を與へるものである。人間道德とは冷いものではなくて暖かいものであり、道德律とは杓子定規ではなくて、自ら血肉をもつて創造するものである。

多感多情な人間山陽に對する非難の一面に、婦人關係の方面がある。山陽を繞る女性としては、初婚の先妻淳子、後妻梨影の外に、愛人江馬細香、平田玉蘊、片山於蘭、その他幾松、細笑などの遊女の一群がある。「江馬山陽先生、賴細香より」といふ文通までした愛人細香女史も山陽のために一生嫁がず、山陽をして「吾實負了」と歎ぜしめた平田玉蘊も失戀の結果、その後は上京しなかつた。かほどの艶福家であつたが、家庭は極めて圓滿、梨影女史をして「十九年の間に候へども、あのくらいな人をおつとにもち、」と云はせて居るところを見れば、山陽の青年時代の遊蕩や女性問題の弱點も次第に超克せられて性道德の上にも、「より惡く」ではなく、「より善く」なつて行つたことは事實である。これも單に表面的な現象や風評の表皮層にのみ批判の目を向けてはゐられないであらう。山陽の放縱な性生活を批判するためには、少くも當時の頽廢的な時代

の空氣、山陽の父母の道學的な窮屈な教育方針、山陽の健康狀態等々の諸事情を綜合した立場からされねばならない。要するに教育界の道德批評には、やはり四角と云はれた春水の道學流の傾向が少くないやうである。世俗に、「戀は思案の外」とか「英雄色を好む」などといふ振幅を持つた戀愛批評が行はれるのも、これは決して不倫の奬勵ではなく、やはり教育的效果を目ざしたものであることを知られねばならない。

人間山陽は、はじめから聖人の座で道を說く人ではなく、俗人の手のとどく地位に下りて來て、共に道を語る人であり、今なほ廣い振幅を持つ社會教育家であり、樂しい道德法の創造者である。

山陽が、好んだ俗謠に、「可愛いいおつとはやばせの沖で、波にゆられてたひをつる」といふのがあつた。彼はこの俗謠に感心し、自分は俵にして海運に廻す程、詩を作つたが、此の俗謠ほど含蓄のあるものは出來ない。僅か二十六字の俚謠であるが、この短い歌の中に夫婦間の、千萬無量の情愛が歌ひ込められてゐると云つたといふことである。彼は社會の小事象にもとつてもつて、自己の詩囊を豐かにするものは、捨てなかつた。彼の文章が浮世繪のやうな大衆性のあるのはそのためであり、彼はかくの如く、常識的で庶民的な醇風美俗の愛好者であつた。事實、彼の

家庭生活は、文字通り、琴瑟相和し、理想的な夫婦愛の生活を實現した。この點では一個平凡な良夫であつた。

殊に夫人梨影は、もと教養も淺い女中であつたが、山陽夫人となつてからは、次第に夫の感化と指導を得て教養も深まり、塾生を愛して內助の功が多かつたが、夫の死後も、第二の梅颸夫人のやうな賢母として、遺兒を教育し、又二郎は父の遺業をついで塾頭となり、三樹三郎は勤皇の志士としていづれも父山陽の名をはづかしめなかつた。そして、山陽なき後の梨影女史は、遂に「貞操奇特之者」として有司から褒賜を受ける程、有終の美をなし、山陽歿後二十四年、五十七歳で逝いたのであるが、この一事を以ても、山陽はひろく社會教育家であつたばかりでなく、家庭教育家であり、愛妻の教育者であつた。

また或る時、京都で散策の途中、山陽は無心に戰爭ごつこをしてゐる京童達の姿に見とれてゐた。自分の幼少の頃の戰爭ごつこのことも聯想されたであらう。一方の大將は楠木正成で兵は少いが隊伍堂々と戰つてゐるが、他方の大將は足利尊氏で兵の數は多いが、隊伍は亂れてゐた。その廻りをまた別の子供達が見物してゐるので、山陽は試みに見物の子供達に、どちらに味方するかときいて見ると、皆口を揃へて楠木方であるといふ。さすがは京都の子供と、山陽も會心の笑

を洩した。そのうちに、戰は果然、正成方の大勝利となり、足利方は散々にやぶれてしまつたので、山陽はいよいよよろこび、「末頼もしい子供達だ」と激賞して、塾に歸つたことがあつた。

楠公を讀んで少年となり、楠公を歌つて青年となり、楠公を論じて五十年を過した山陽である。彼の目には街の小景も、たちまち千早城となり湊川となつた。この逸話の中に山陽こそ、眞にたくましさる社會教育家であり、街の勤皇家である。

二、山陽學と教育精神

狹義の教育においては、山陽もまた山陽塾といふ一つの漢學塾の塾頭であり、一個の私塾の教師であつた。しかも、永久の青年塾頭であつた。

教育史上では、山陽の立場は、皇道學派の中の歷史學派と觀られてゐる。卽ち皇道學派もしくは勤皇學派と云ふべきものの中に、山崎闇齋の闇齋學派、光圀や東湖の水戸學派、宣長や篤胤などの國學派に對して、山陽の歷史學派があり、そして國學派に對しては漢學派といふべきであらう。

山陽の學問的立場については、弟子の間にさへ論爭がある。しかし父春水をはじめその周圍には朱子學派が多い關係上、彼もまた根本的には朱子學者といふべきであり、父春水や叔父杏坪や柴野栗山、尾藤二洲などから受けた教育はもとより朱子學である。しかし彼の思想的系統は、山崎闇齋の流れを受けたものである。卽、彼が十八歲の時に江戸に遊學した當時、叔父杏坪とともに從學した服部赤齋は、闇齋派の正統の學者であり、かの竹原の唐崎赤齋もやはり栗齋の指導を受けた人である。山陽には「高山彥九郎傳」があるが、栗齋は高山彥九郎の同志で正之の死後、自殺したことは前に述べた通りである。

しかしながら、賴山陽は朱子學にその大義名分の思想を學びとつたが、彼の教育は、漢學塾と云つても、子弟にただ朱子學を傳授すればよいといふやうなものではなかつた。單なる日本を忘れた漢學者は老漢の奴隸であるといひ、また妄に漢學を排斥する國學者に對しては「子等我邦を小視す。故に介介然として、漢を抑へ和を揚ぐることを誘と爲す。余の如きは思らく、我邦至大、四外貢する所の文籍を取り、以て我用を爲す。何ぞ敢て漢を以て對と爲さんと。」と述べてゐる。漢學もまた日本のために活用すべしといふ立場である。

從つて彼の學問は決して朱子學の奴隸ではなくて、朱子學を日本化した山陽學といふべきもの

であり、彼は陽明學派の大鹽中齋とも深く交はり、佐藤一齋をも歡迎した。來る者は拒まず一切の學問を勤皇の大義に活かすのが山陽學である。彼は「學の實用に通ぜざるは後世の通稱なり」と云ひ「我が學は、一字の宗旨あり、實と曰ふ、又折ちて兩字となし、適用と曰ふ」と述べ、「今日の學の實用に適せざるは、師儒の不逮と雖も、抑も亦事勢の然らしむるなり」と學問活用の必要を說いてゐるのである。

文政十年の頃、彼は大橋中齋と交つて、王陽明の「傳習錄」を讀み、その讀後感にかう述べてゐる。

「格知之說、未だ必ずしも大學の本旨にあらず。然れども學問之道は、則ち此の如くならざるを得ず。程子のいはゆる、日に一件を格せば、積むこと久しくして脫然自ら貫通する所ありとは、極めて穩妥にして人情に近し。朱子に至つては其の意に原づきて說く。凡そ天下の物に就いて、其の理を窮め、一旦豁然として貫通すと。大言は炎々として恐らくは語病に屬す。支離の譏を招く所以なり。陽明は用世の人。其の初め實に天下の理を窮めんと欲して、其の實落なきに苦しみ、大呼を發して曰く。自家自ら知覺あるも、其の機利害得失の中に汨沒す。故に其の靈活を失ふのみ。苟も失はざれば則ち天下の事辯ずべし。之を良知良能と謂ふ。故に曰く、

知行合一なりと。其の旨、約にして其の用、廣し。其の學、朱子に敵して廢れざる所以のみ。其の實、陽明家の良知は、孟子の良知にあらず。之を要するに漢人の學は、皆、世用の爲なり。物に應ずる上に於て力を着く。故に之を心地に驗せざるを得ず。邦人の學は、文字を學ぶのみ。故に心性に及ぶ者少し。吾が友、大鹽士起、王學を喜む。吾れ未だ曾て與に學を論ぜざれども、其の人豪傑、まさに此の學を以て用に適すべきを知る。用に適すれば斯れ可なり。又其の必ず口を良知に藉口し以て恣睢を爲すこと、明清間の王學者流の如くならざるを知るなり。」

彼が「通鑑要目」を讀んだ後、栗山の問ひに答へて、大意の把握を云つたことは、彼の學問の立場をすでにその當時から、明示したものであつた。「古の學者は大義に通じて用に適する」として今の漢學者が徒に訓話註釋の詮索に力を注ぐことを「通疝」とした。

「吾れ入學の士に教ふる、必ず先づ大義に通ぜよと曰ふ」といふのが、山陽學の教育精神であり、これは山陽が、小義に拘泥せず大義をとつて動かない生活態度と一體の主義方針である。

したがつて、山陽學の精神は、必ずしも漢學者を養成するにあるのではなく、時世に有用な人材、即ち實用的人材を作ることであつた。事實、彼の門下からは、各藩の政治に經濟に實用の器が輩出してゐる。しかし彼は、いはゆる倒幕論者ではなく、現實的な革新論者であつたから、直

接に、倒幕の志士を養成するのではなく、藩のため國家のため、大義名分を確立して勤皇精神を普及させることが、彼のいはゆる「大義」に通ずる「適用」の學であつた。

山陽學の特色としては、普通、國民的であること、批評的であること、藝術的であることがあげられてゐる。山陽學は山陽自身の人格の表現であり、彼は愛國者であり、批評家であり、そして詩人であつたからである。それは當然、教育精神の上にもあらはれたものである。

今日に於ても、教育の革新目標は「皇國の道に則ること」を第一に强調されてゐるが、山陽が皇道を中心として、批評的であり藝術的であり、むしろこの三つを綜合したところに山陽學を特色づけたことは、今日の教育革新にとつても大きな暗示となるであらう。

山陽は愛國精神が旺盛であるがために、その立場から批評的であり、それの表現をあくまで詩人的立場をもつてしたために、獨自の役割をはたしたのである。彼の勤皇論も批評も、藝術的表現のゆえに千里を走ることが出來たのである。

山陽學自體は、支那學の日本化である點ですでに大きな批評であり、それの徹底化に教育力があつた。しかし、山陽の優れた點は、歴史學者として、また支那文學者としてであり、批評家として藝術家として傑出したのである。菅茶山をして「文章は無双也」といはしめた彼の藝術的天

分は文字通り、當代隨一であつた。特にその大衆性のある表現は、他の追隨をゆるさぬものがあつた。その時代には星巖、一齋をはじめ、詩人として優れた人は少くなかつたが、山陽のやうに全國民詩人となり、世界的な詩人となつたものはなかつた。形式は支那文學を假りてゐるけれども、そこには、世界の詩壇に訴へることの出來る日本精神の躍動があり、藝術的形象があつた。愛國詩人としての彼の强味はそこにある。大衆の心情に通じ、大衆の言葉を持つてゐたことが、布衣山陽の强味であつた。およそ奬勵して讀まさねばならないやうなものは、眞に國民文學と呼ぶには不十分である。「脛なくして千里を走る」ものこそ、眞の國民文學である。

愛國精神や武士道を文學的表現をもつて後世に傳へたところに、山陽精神の偉大さがある。彼こそ、まことの日本文士の典型である。

文章の修練を通して愛國者を養成することが、山陽塾の目標である。文士の錬成が山陽の念願であつた。文章の修練は山陽道の極意である。彼ほど文章の推敲に努力したものはなかつた。一日二日の推敲ではなかつた。「日本外史」は二十年、原稿を肌身離さず推敲を重ねたものである。今日の作文教育にはたして、その百分の一の熱意があるであらうか。

「文章の效ある。微は茫漠たる雲烟の精を探り、細は織糸毳毛の末に及び、流れて大河となり、聳えて山嶽となり、下は滄海萬仞の深さに至り、上は遼遠不測の星辰に達し、赫々たること旭日の天に昇るが如く、清秀なること姱月の良夜に輝くが如く、發しては花となり、散じては霜となり、藏すれば粟となる、彝倫の道これが爲に明かに、風教これが爲に維持し、晋に在りては董狐の筆、魯に在りては仲尼の春秋、共に千歳の下、凜乎として生色あるもの、是れ卽ち文章の德なり、吾豈文章を修めずして可ならんや。」

かかる情熱と信念のもとに、彼は文章を學んだ。そして文章道に武士道を觀、文法に戰法を觀たのである。文士とは彼にとつては、まさに「文章の武士」であつた。彼曰く、

「襄や文を屬す。顧みて大將の兵を用ふるが如しと云ふ。百言を屬す、百騎を用ゆるなり。千萬言を屬す、千萬騎を用ゆるなり。法にあらざれば用ふべからず、法に拘るべからず。其の機我に在るのみ。前權後勁、左龍右虎、闔陳束伍、其の旌戟を列す。是れ文を爲すの正。正、變じて奇。游卒、其の兩翼を捭て、而して伏兵、疑兵、首尾共に起る。從麾して從ふ。横麾して横はる。百千萬騎、跳躍騁頓。人、其の端倪を知るなし。而して麾て之を收む。則ち陣伍依然たり。刁斗、警むる所、萬馬、聲を无し。能く然る者は何ぞ、其の機、我に在るのみ。何ぞ必ずしも古法を襲はん。古法を襲はずして古法に合す。文に英雄たるに庶からんか。」

かかる信念のもとに作りなした彼の文章は、百錬の鐵の威力があり、精神の利劍となつて封建の牙城を拔き、文字通り、「文に英雄たる」ことが出來たのであつた。文士の本道はここにある。かかる文士の養成が、山陽塾の道標であり、山陽塾は文章報國塾であつた。

彼はまた、「小文規則」に自ら序して曰く、

「襄、つねに謂ふ、文をやるは、猶兵を用ゐるが如し、用ゐる所、ますます多くして、而して其の法ますます失すべからず。本邦の人、善く大文をやらず、五六百言以往は亂雜なるのみ。之れを庸將の多兵を統ぶるに譬ふ、まさに以て自ら累はすに足るなり。夫れ唐宋四家は文の肇、白なり。多々ますます善し。而も時として寡を用ゐて勝てり。今旦其の寡を用ゐて勝つものを取り、以て學ぶ者法と爲す。學ぶ者、苟も此の法に熟すれば、能く一隊を領せん。則ち異日、壇に登り、千軍萬馬、奇正闔闢、亦此の法を以て之を推さんのみ。」

ここにも、山陽の文章道がある。この意氣をもつて「拮据二十年」遂に、二十二卷、千萬言の大作「日本外史」を戰ひとり、用兵の妙を得たのである。

山陽の生活が、反道德の形をもつた眞の道德生活であつたやうに、山陽塾は、漢學塾の形をもつた日本塾であり、日本精神の發電所であつた。

山陽の門下には、大阪に私塾を開いた後藤松陰、洋式兵學を以て幕府の顧問となつた江木鰐水、山陽の遺業たる日本政記を完成した關藤藤陰、吉田松陰をはじめ多くの勤皇の志士を教へた森田節齋、その他多數の實用的人材を出してゐるが、大部分は、文學及び教育を通して報國の誠を盡したいはゆる文士であつた。

したがつて、山陽塾の教育は、教育そのものが空理や道樂ではなく、その形式の如何に關らず、時勢適用の教育であつた。ある程度まで文士養成の目的を達成したものである。

教育者としての山陽が、その大きな業績に較べて、現代に回顧され再認識されることの少いのは、一つは山陽の行跡の形式のためであり、一つは漢學といふ形式のためであるが、その根本精神に至つては、今日、英語やドイツ語の教育によつて世界的日本人の養成を企圖するのと選ぶところはないであらう。特に、批評的と文學的と日本的とを統合した山陽塾の教育精神は、現代においてこそ、より高き評價に値するではあるまいか。

三、山陽塾の教育方法

山陽塾の教育方法も、形式に拘泥せぬ實用主義であつた。彼の文章學が、字句の詮索よりも「大義」への肉迫を重點としたやうに、いやしくも勤皇の大義を闡明するものである限り區々たる形式に拘泥しなかつた。これは山陽の生活態度から見ても首肯される。ただ、山陽の教育は、ただに子弟に教へるだけが能事ではなく、眞實の意味における倶學倶進であつて、塾は門弟にとつて學園であるばかりでなく、塾頭の學問所であつた。そこでは、「日本外史」その他の事業が進められ、その仕事に門弟も參加し合流して、子弟一體の修學が出來たのである。「日本外史」そのものが生きた教材となつた。

山陽塾の主教材は、もとより四書や五經の支那文學であつたが、常に批判的に實用的に學修せしめ、四書五經を學ぶのは、その文章を通じて大義を明かにし、自主的な判斷力を養ふことを主眼とした。支那學のために支那學を學ぶのではなく、いつも日本男兒となるがために、支那學を勉强するといふ態度であつた。

教授の方法も、形式的な講演式ではなく、座談風に說くことが多かつた。

坂本箕山の「賴山陽大觀」によれば

「書を講ずるに敢て辯を飾らず、諄々として說くこと、さながら談話の如く、倦めば烟を吹

き、茶を喫み、必ず蘊奧を摘發し、妙旨を剛析して、聽者をして、諒解せしめねば已まぬ。醉餘たはむれに外史を講ずる事ある時は、手拭を以て額を縛り、手に塵を拂ふ采配を取り、且つ說き且つ揮ふこと、恰も講談師の軍記を演ずるに似たる態であつた。

又門生中の勉强家には、奬勵以て懇切に教へ、不勉强家には冷語にて戒む。例へば門生が詩の添削を乞ひ夜話などの序に催促することあれば、なるほど草稿は見たが、絕句のみ多くして、古詩が少いやうだと云ひ、鍛錬の足りないのを諷刺した。彼の教育法は斯の如く自由主義で開發的であつた。而して經世有用を主とした。」

と述べてゐる。自由、開發を手段として、あくまで勤皇の蘊奧を把握させ、經世有用の人材を作るのが主眼である。したがつて、今日のいはゆる西洋流の自由教育とは、似而非なるものであつた。

當時の教育の强味は、何と云つても、教材と塾頭との一體化してゐることである。教師と子弟とが、同一の教材に取り組んだ教育であり、教授とは、他人の編纂した教科書を教へることではなく、教師自身が血涙をもつて叩きあげ錬りなした學問の道を傳授することであつた。したがつて、教材は悉く教師が年來、消化し咀嚼し切つたものばかりであり、云はば自己の編纂した教科

書を教へるのである。

なほ、前記の引用文によつても明かなやうに、山陽の教育は人を觀て法を說く個性的方法であつた。ある時は、門弟の描いた繪に山陽が賛をするとか、師弟の間の個人的生命の交流を重視した。

塾の教育は塾頭の人格によつて支配されるものであるが、山陽は十八歳の時江戸に遊學して昌平校で學んだ外は、殆ど自學自習の人であり、しかし昌平校でもさうであつたやうに、學校の講義といふやうなものには却つて反感を持ち、それよりは自己流の自己教育に熱中する方であつた。昌平校を僅か一年で退學歸鄉した理由については諸說があるが、その時叔父杏坪に答へた青年山陽の言葉に、「ここでやる位の學問なら廣島に居ても出來る」といふ意味のものがあつたが、天才山陽には平板で四角張つた講義などは大した興味はなかつた。

彼は既に十歳の頃、母が夜なべの針仕事のかたはら論語や孟子の句讀を教へた頃にも、「余は溫習を懈り唯好んで所謂繪本を觀るのみ。先君これを聞き都門に於て繡像の保、平物語及び義貞記を買うて寄至せらる……後來の史學は、實にここに開けり」と自ら記してゐる通り、自學によつて史學の基礎をきり開いた人であるから、門弟に對しても自分の苦い經驗を强制するやうなこと

はなかつた。門弟に對しても友人や同志として應對し、門弟をして自發的に自ら學ばせるといふ態度であつた。

しかし、山陽は決して學問の道にルーズでよいといふ自由主義ではなかつた。むしろ嚴格な方であり、自分は禮儀正しい方ではなかつたが、禮儀の教育なども等閑にしたのではなかつた。

「彼が禮儀を講ずるに當り、大幅紙に堂堂の圖を作り、寸餘の木偶を以て、實地演儀にかたどつて教へ、之を群說に考證して可不可を檢定した。」（坂本箕山）

といふから、禮儀教育には、なかなか工夫を凝らしたものである。

弟子を教へるには、やはり山陽らしい工夫を加へ、教授に苦心を拂つたことは事實である。「山陽先生の幽光」の中にこんな逸話が引例として出されてゐる。

「山陽門生を教授するには色々の例を引いて講ぜらる。其の豐富なる學識は、門生の及ばぬ處、師と弟子との懸隔は其處に在るのである。或る時、門人福地某が、一度先生を困らせて見たいと思うたが、博識なる先生は、普通の事では困らぬ。何か意外の問題を持ち出さうと數日間、業を休んで考へた末、漸く思ひついた。それは「支那で和歌の初は何時頃か」と云ふ事である。是れならば先生も困るだらうと思うた、思へば一時も默止し難いので、或日先生の前に

出ていふには、「先生、支那で和歌は何時始まりましたか」を問うた。すると先生は考へた。

「こんな下らぬ問題で、時間を費すは惜しいことである。よし此は直に仇打して再びこんな事を考へぬ様にせねばならぬ」と。

其の問題の解釋は先方へ委せて、更に別問題を考へ出された。併しそれは福地には解らぬから、彼は頻に前問題の答を求めた。

すると先生は

「汝、それを知つて居るならば申して見よ」

と申された。彼は得意然として

「支那で和歌は孔子の時であつたと思ふ。即論語の顏淵の篇に出てゐる。司馬牛が『憂ひて曰く、人は皆、兄弟あれど、吾獨なし』といふのである。」

と云つて、凱歌を奏しさうであつた。

處が、其の備へざるを擊つといふ兵法とも云ふべきか、先生は突如と問はれた。

「支那で發句の初は何時か。」

と。彼は周章狼狽の有樣である。そこで先生は、

「和歌の初ばかり知つて、發句の初を知らぬは無學である。支那でも時候を讀み込んである。」

などといはれたので、いよいよ聞きたくなつたので、彼は低頭平身で教を乞ふた。先生は

「春秋時代に始まつた。それは春秋の初に、『夏五月、鄭伯段に、鄢に克つ』とある。」

と云うて、猶も言を續けて、

「扨も是は、余が思ひ付いた事であるが、畢竟、無益な事である。汝が提出した問題では莫大な時間を費したであらう。今後の誡の爲、即坐の仇討を致した。」

と云はれたので、福地生は恥入つたとの事である。」

これによつても、山陽塾の教育が、理のあるところはあくまで强壓的でなく、手段をつくし、工夫を凝したものであるかわかるであらう。

この福地生については、今一つかういふ逸話がある。

「一日、山陽がこの福地生を連れて、有名なる歌人の家を訪うた。歌人は大和詞の優美なることを述べて、種々の歌や文章を引き、漢學者の詩や文章ではこんな美文の眞似は出來ぬと誇つた。

山陽は、始終、謹聽して居られるが、福地生はこれを遺憾に思つたが、突飛なことを云つて反抗した。

「成程、日本の事は大和詞で寫したら優美でせうが、支那の事は漢文に限る。日本語では力が拔けたやうである。例せば、三國誌に『張飛提三尖矛立長板橋』とある。之を訓讀すれば『張飛、三尖矛を提げて、長板橋に立つ』と讀めば、張飛が活動して居る樣に感ぜられるが、先生の先刻より御自慢の大和詞で之を讀むと『はりとびが、みつまたぼこをひつさげて、ながいたばしにつつたちにけり』是では張飛の勢も拔けて、張飛の虎のやうではありませぬか。」

といつて、漢學者の敗勢を挽回せんと意氣込みであつた。

そこで山陽は、俄に福地生を促して其の歌人に暇を告げ、其の門を出るや否や彼を叱責せられた。

「彼の先生は、今日有名な歌道の大家であつて、其の話は一言半句皆有益であればこそ謹聽して居た。然るに、汝は何たる失言ぞ、彼の先生は大家であるので、何とも思はれぬが、以來、屹度心得居れ。」

と誡められた。」

山陽は「聽き上手」であり、他の言を容れては自己教育する人であつた。そしてこの逸話にもあるやうに、師弟はいかなる時でも、一體となつて遂に俱學俱進する、同志同行であつた。教育といふよりは友情であり友愛であつた。師弟が詩の唱和をしたり、お互に切嗟啄磨して相互に修練してゆくのである。

山陽が自發的學習を勸めるのは、單に學問の手段としてではなく、彼は學問を樂しむ人であつた。從つて學習を樂しいものにせねばならない。學問愛が彼の生命であり、門弟にもまた學問と愛に生きさせようとした。

從つて、苟も學問を等閑にしたり道樂視したりすることは、極端に排した。

山陽は感情家である。由來、わが儘で病身で神經衰弱でもあつた山陽の教授は相當氣むづかしく、嚴格なものであつたと想像される。後に犬山藩主に聘せられて有名な學者となつた村瀨乙太が、山陽塾にゐた頃、或る日居眠りをして居たといふので山陽は「それで學者となれると思ふか」と一喝するや否や、傍にあつた硯を村瀨の背に投げつけた、村瀨が後に一家をなしてからいつも門弟達に背中の疵跡を示して「自分の今日あるは山陽先用のお蔭である」と教へたといふ事である。山陽行狀記に「八九歳より喜んで國字本、古今の軍記を讀んで寢食を忘るに至る」とい

ひ、讀書を禁ぜられて夜中に燈火を隠して讀書し、過度の勉强のために眼病を病みなどして、刻苦自奮して學者となつた山陽には、「居眠り」などは思ひもよらぬところであつた。山陽の嚴格は、やはり自分の刻苦自學の精神から發したものであらう。

しかし、世間では山陽塾は嚴格過ぎるといふやうな評判であつた。或る時、山陽は料理屋で若い按摩に揉を肩ませながら、その身の上話を聞くと、豈はからんやこの青年は賴山陽の名聲を聞いて志を立てて京都に來て見ると、山陽が嚴格すぎて弟子に亂暴であるといふ風評を聞き、方途に迷ひ路銀も盡きて按摩となつたといふ話であつた。山陽はそれとなく青年を慰めて、この青年に持つてゐた金を渡して激勵し、その夜は塾に歸ると門弟を集めて酒宴を開いて門弟達をよろこばせたが、以後はあまり亂暴なことはしなかつたといふことである。

どんな人の言葉でも、聽べきところのあるものは容れて自己を反省して改めるといふのが、山陽の人生觀の長所であつた。彼は傲慢であると云はれたが、理のあるところには、あくまで頭を下げた。

彼の時は諸侯に屈しなかつたが、屈すべきところには屈し、聽くべきところには傾聽した。

彼は門弟を見るにも、徒らに、彼の前に叩頭する人物のみを信ずるといふのではなく、たとひ

彼に反抗する人物でも信ずべきものは信じた。自己をよく知るやうに、他をもよく知つたのである。

山陽の遺兒の中第四子、三樹三郎は僅か三歳であつたが、身體は最も頑健で病氣を知らず、飯はあまり食ひすぎるので、一回四杯と制限するほどであつたが、惡戲と剛情でいつも母を困らせてゐた。三樹三郎は後に江戸に遊學した時も、上野の東叡山の領内にある不忍池の辨天島で面白半分に石塔を池の中に蹴飛ばして、東叡山の坊主達に縛られ落命するほどの折檻を受けた程で遂に昌平校も退學をさせられた亂暴者であつた。

この三樹三郎の將來については、山陽も非常に氣にしたと見へて、死の直前、妻梨影を枕許に呼んで、次のやうな遺言があつた。

「それについて、お身に是非賴みたいことは、お身も知る通り、三樹三郎は普通の子ではない。育て方が善かつたら、きつと大人物にもなれやうが、若し一歩を誤れば、如何なる變事がないとも限らぬ。之が心殘りである。そこで、私が瞑目したら、遺骸の始末をつけぬ内に、川上東山を訪ねて、山陽が臨終に伜三樹三郎の事をくれぐれも賴めと云つたと、告げて、お身が自ら三樹三郎を連れて、親しく訪問するのぢや、きつと賴んだぞ。」

この意外な遺言には、母梨影も驚いたものである。それもその筈、これだけ多くの門弟が現に山陽塾に殘つてゐるにもかかはらず、むしろ敵の軍門にあつて、山陽塾に弓を引いてゐる川上東山に三樹三郎の教育を託さうといふことは、眞に意外なことであつた。

川上東山は、越前の人で、かつては、山陽の門下生中でも最も硬骨漢として知られた人であつた。しかるにふとした事から、山陽塾を去つたのである。或る日、山陽は親友の畫家浦上春琴の來訪を受けて二人は、二階で酒となつた。そのうち、二階で頻りに手を鳴らして呼んだが、恰も梨影も女中も外出してゐたので、門弟の川上が二階に上つて行つた、すると兩人は、相當醉つてゐて、春琴は川上の前に空の德利をつき出して「酒を持て」と命じた。

もともと硬骨漢である川上は、弟子を置いて酒を飲んでゐる兩人に對して不快を感じたものか、春琴の語氣を憤つてか、「默れ、酒がなければ勝手にせよ」と言つた。酒氣を帶びた春琴も默つては居らず、遂に二人とも立上つて一大事にも及ぼうとしたので、山陽は兄弟のやうに親密な春琴の手前もあり、川上を叱りつけ

「私の客人に對して無禮ではないか。議論はともかく、門生としての分際を知らぬか。お前がかく已れの客に反抗するのは、師匠に對して反抗すると同じことだ。其の様な不心得なものは、

今日限り破門する、出てゆけ。」

と言つた。

それを聞くと川上は、直ちに荷物を纒めて塾を去つたのであつた。

爾來、川上はかの山陽の病中、正統論で大いに論爭した猪飼敬所の門下生となつた。恰も山陽塾の商賣仇の門に降つた形である。その川上は自ら塾を開いた後も、常に山陽を惡罵し續けてゐたのであつた。それを承知の上で、山陽が一子を託するものは此の人であるとしたその見識には、山陽らしいものがある。

遺言の通り、梨影は山陽の死の翌日、御通夜の夜の明けきらぬうちに、三樹三郎を連れて川上東山を訪たが、川上は容易に面會を承知しなかつた。强いて面會して遺言の次第を述べ三樹三郎の教導のことを賴んだ時、川上東山もはじめて師恩のありがたさに打たれ、更めて禮服を着用して二人を上座に直して長い間の不心得を謝し、共に手を取つて幾く久しき水西莊の門をくぐつて今はなき師の遺骸の前に禮拜して、身にあまる光榮を感謝したのであつた。

三樹三郎は、後には後藤藤陰にも學び昌平校にも入學したが、その最も困難な少年時代の教育はこの川上の手によつたものである。三樹三郎が、父の遺志をついで、父の豫言の通り、大人物

となり得たかげには、教育者であり父である山陽のかかる苦衷が潜められてゐたのであつた。

教師の最大の資格は、人を見るの明であり、それはただ師の利己的立場からのみなさるべきものではない。師父に弓引くものを信じ得た山陽こそ、教育的見識の人と云ふべきであらう。

山陽の教育家としての強味は、彼が多藝多能の天才であつたことである。教育家は必ずしも學者であることを必要としない。教へられるものは、多種多樣の人間である。從つて教育家は、人生百般のことに對して、理會がなければならない。

山陽は、史學、漢學はもとより、漢詩の外に書と畫の趣味が深かつた。書道にしても、普通一般の技倆ではなく、殆ど書をもつて生活費を稼いだだけあつて、山陽流と云つても、遠く支那の書道の蘊奥を究めた上で一派をなしたものであり、畫も單なる素人畫ではなく、それとともに書論があり、畫論がある。

例へばかつて、書家市河米庵を送る序には、書家山陽の躍如たるものがある。

「書を論ずるは、猶山水を觀るが如し、山水は造花に成り、而して書法は神氣に出づ、均しく自然のみ。其の自然を會せずして、其の形迹に規々たるは、未だともにこれを語るに足らざるなり。……夫れ富岳の山たるや、大井の水たるや、雄壯を以て勝る、嵐山、鴨河は、秀媚を以

て勝る。阿蘇、溫山、玄海、紫溟は、奇拔宏濶を以て勝る。今、此の諸勝、これを書法に比すれば、猶鍾、王、顏、柳、米、蔡諸子の如きか。諸子の書に於ける、諸體を兼ね具へざるなしと雖も、而も其の最も長ずる所を要するに、亦各名づくべきものあり、猶彼の流るるものと、峠つものと、其の體を同うして、其の氣を異にするが如し、

今や孔陽は謂ゆる體を同うして、氣を異にするもの……異日これを筆端に發するもの、前諸子の長ずる所を兼ね、これをやるに己が神氣を以てすれば、雄壯なるものあり、秀媚なるものあり、奇拔宏濶なるものあり、變幻百出、施すとして彼の造花の物に隨うて形を賦し、而も其の巧なるに心なきごとくならん、亦何ぞ規々として古人の形迹を追ひ、其の矩矱の間に局促せんや。行けや行陽、阿蘇、溫山、玄海、紫溟は、則ち予すでに之れを記せり。再び彼の嵐山・鴨河・富岳・大川を過ぎり、仰いで觀、俯して思はば、謂はゆる鍾・王・顏・柳・米蔡の諸子、果して似たるや否や、すなはち其の神氣の髣髴たるもの、必ず區々摸榻の能く傳ふる所に非ざるもののあらん。」

この書論にあるやうに、山陽の筆蹟には青年的氣魄の豐かなものがある。

書畫、骨董の鑑賞眼も堂に入り、すべて日常の器物に對しても一隻眼を備へてゐたのである。

彼がいかなる環境にあつても人生に退屈することのなかつたのは、この多角的な人生愛のためである。

書畫、骨董の外に、石を愛し、珍名三十六個を集めたといふ。彼が愛用した印は七十餘種もあり、自ら刻んだものも九個もある。また漢詩の外に和歌も作り、酒道はもとより豪のもの、茶道にも通じてゐた。尾道にある門人橋本竹下に與へた手紙に、

「茶の入様は、此のすやきのきびしよにて、湯を活火にて沸せしめ、湯氣の口より一條出候時、今一ツのきびしよをうへむけて、上に蓋をして、中をあたため、扨引上にて、其の中に茶を入、手早く右の湯を中へさし、蓋をして、しばらく置て、茶碗にあければ、眞のやまぶき色を成し候なり。そして此菓子にて御試下さるべく候。茶は是にて二度分ほどあるべし、此味を知らずは田舍漢なり。人間、此の清味を知らざるは口惜しき事ならずや、是奢侈を敎るにあらず。」

などと手紙で門人に茶道敎授をしてゐるのである。

彼は人生の熱愛者であり、芝居を好み、平家琵琶にも熱心で門人牧百峰とともに新曲の出る毎に習ひに行つたといふ。笛や劔舞など、あらゆる方面に手をのばし、しかも行くとして可ならさ

るはなしといふ多趣味であつた。

彼の文章があらゆる人間に訴へる力のあるのも、また彼が、朱子學者と陽明學者、漢學者と國學者、政治家と宗敎家、貴族と庶民、男性女性の別なく多角的でしかも深い交りをなしたのは、一つはこの多藝多能のためである。これがために、學問は粗雜であると云はれたが、限りある人間にとつては、全てにわたつて徹底することは不可であり、彼が批評家として、また敎育家として成功した所以は、この人生に對する全圓的な理解によるところが多いのである。

この點に於ても、われわれは、敎育家の性格として、學ぶべきものがある。敎育の動力は人間であり、多角的な人間理解のないところに個性的な子弟の生長は期待されない。

殊に今日の皇道敎育の復興期にあたつて、その方面の理論的豐穰にもかかはらず、人間的、そして藝術的貧困は、遺憾ながら蔽ひ難い事實である。しかるに日本は詩の國であり、文學の國である。文豪にして敎育者であり、勤皇家であつた山陽を再認識することは、敎育建設時代の時務であらう。皇道敎育に人間的振幅と藝術的潤飾とを與へることは、まさに青年敎師の負擔であり、あらゆる意味に於て山陽こそ、青年敎師の大宗であり、先驅者であらう。

——(終)——

昭和十六年九月八日印刷
昭和十六年九月廿四日發行

一

定價貳圓

著者　上田庄三郎（ウヘダ　シヨウ　サブ　ロウ）

發行者　東京市本郷區元町二ノ二二　生地龍太郎

印刷者　東京市小石川區江戸川町二九　鈴木熊夫

鈴山堂印刷所

發行所　東京市本郷區元町二丁目二十一　啓文社
電話小石川五五二九番
振替口座東京五七五九番

東京市神田區淡路町二丁目九
配給元　日本出版配給株式會社

錬成行の學校訓練　松田友吉著　菊判上製四五〇頁　定價三・〇〇　送廿二

皇民錬成　學校訓練の新形態　長谷川瑞著　菊判上製三五〇頁　定價三・二〇　送廿二

皇民錬成の訓育形態　後藤博美著　四六判上製三五〇頁　定價二・五〇　送十四

教學一體　國民學校教授原論　長谷川瑞著　菊判上製三〇〇頁　定價二・八〇　送廿二

錬成行の學校經營　小林節藏著　菊判上製五〇〇頁　定價三・五〇　送廿二

國民學校　初學年の教室經營　松田友吉著　四六判上製四五〇頁　定價三・〇〇　送廿二

國民學校　教科組織の新形態　太田久四郎著　四六判上製二七〇頁　定價一・八〇　送十二

國民學校　鄕土觀察の新形態　後藤博美著　四六判上製二二〇頁　定價一・七〇　送十二

國民學校　自然觀察及鄕土觀察　濱田三郎著　四六判上製三〇〇頁　定價二・三〇　送十四

國民學校　話し方教育の實踐形態　飛田多喜雄著　四六判上製二八〇頁　定價二・三〇　送十二

國民科讀方の新形態　米田政榮著　四六判上製一八〇頁　定價一・五〇　送十二

國民科綴方の新經營　今田甚左衞門著　四六判上製三五〇頁　定價二・五〇　送十四

國民科地理の實踐形態　後藤博美著　菊判上製二五〇頁　定價二・四〇　送十四

國民學校　藝能科家事の建設　林勇記著　四六判上製二六〇頁　定價二・〇〇　送十四

啓文社出版

國民學校教師論　上田庄三郎著　菊判上製二六〇頁　定價二・三〇　送十四

青年教師論　上田庄三郎著　四六判上製三〇〇頁　定價一・八〇　送十四

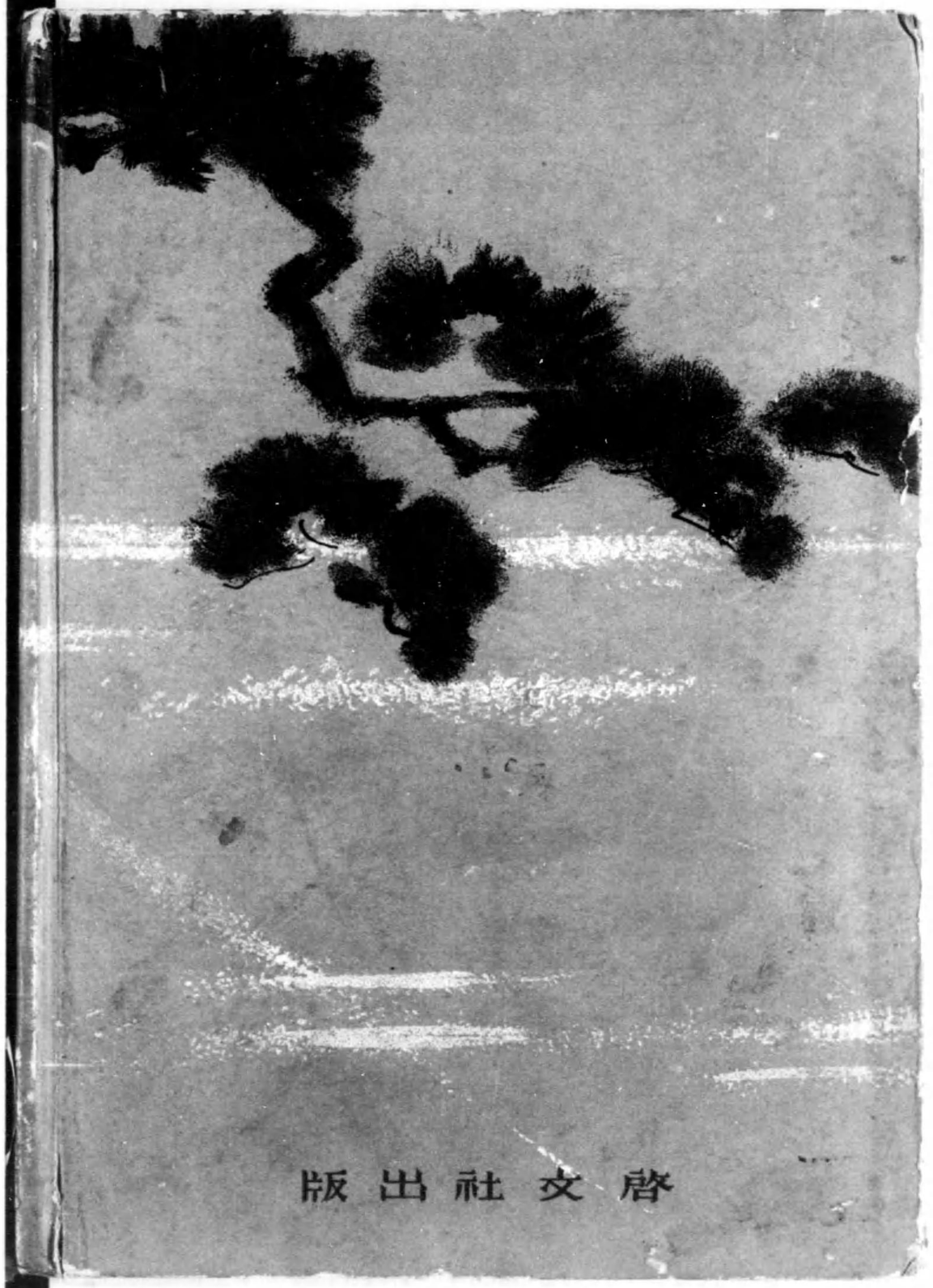
女教師論　上田庄三郎著　四六判上製三〇〇頁　定價二・〇〇　送十四

青年教師　吉田松陰　上田庄三郎著　四六判上製三八〇頁　定價一・八〇　送十四

青年教師　石川啄木　上田庄三郎著　四六判上製三〇〇頁　定價一・八〇　送十四

讀方教育發達史　峯地光重著　菊判上製三五〇頁　定價三・〇〇　送十四

綴方教育發達史　峯地光重著　菊判上製三〇〇頁　定價二・七〇　送十四

991
228

終